

岩盤に向けて……

おは

UTAブック編



石盤に向かって
.....

はじめに

目を閉じて静かに思う、何を思うのか、そう自分自身です。自分の中の本当の自分の世界を思うんです。そこには何がありますか。何もありません。ただ嬉しいんです。ありがとうございます。優しい温もりの中に、安らぎの中にある自分を感じ幸せでしょう。嬉しいでしょう。涙が知らずのうちに出てくるでしょう。そして何か語りたいですね。どうぞ、異語で自分の中の思いを語つてみてください。何を語っているのかなんて頭を動かさなくていいんです。ただ口から出るがままに、そして自分の中を感じてください。

嬉しい、嬉しい、ありがとうございます、ありがとうございます、幸せです、嬉しいです、ありがとうございます。そんな思いが溢れてきていると思います。

嬉しい、楽しい瞑想の時間を持つてください。もちろん、中の岩盤が喚わめきます。何とも言えない凄いエネルギー、凄すさまじいエネルギーの坩埚るつぼを感じます。それでも、それでもふうつと思いを向けてみてください。

今感じた優しさ、温もり、広がりの思いに触れていこうと思いを向けてみてください。そう

して、自分と自分の中どんどん歩みを続けてください。肉のある間に、しつかりと自分のこれから行く末を知つてください。

(UTAの輪の中でともに学ぼう 1976より)

形の世界が崩れていくことがいいんです。手放したくない、ここだけは、これだけはとしがみつく思い、私は正しいという思いが苦しいことだと分かつていてるけれど、離そうにも離れない思いです。けれど、私達は痛みを伴いながら手を離し、思いを離していく、変えていく方向に自分を進めていきます。本当の自分に目覚めるということは、そういうことです。

肉を本物とする思いに長く長く慣れ親しんできた私達だから、それを一八〇度転回するということと、肉、形の世界は影の世界、実体がない世界だと心で分かることは、本当に難解です。

それをこれから二五〇年、三〇〇年の間に遂行していくとするのだから、当然そこには想像を絶する現象の波が押し寄せます。そして、そこにはそれにも増して、いいえそれとは比べることができない規模の愛のエネルギーの存在があります。

その愛の中ですべてがなされていくことです。心を全開にして、ともに喜びを分かち合いましょ

う。私達は愛、愛のエネルギー。宇宙にその喜びが爆発していきます。私達は宇宙です。私達のふるさとへ帰りましょう。

(UTAの輪の中でともに学ぼう
1983より)

あなたの中心棒、芽吹きの兆しがありますか。まだまだ岩盤のひび割れはありますか。はたまた粘土層に四苦八苦ですか。ほんの数ミリでもいいんです。芽吹いてください。開けた柔らかな温かいところで、新鮮な空気を気持ちよく吸い込み、真つ直ぐに真っ直ぐに育っていきましょう。根なし草ではなくて、いい循環を繰り返して大きく太く、そしてしなやかに育つていきましょう。

(UTAの輪の中でともに学ぼう
612より)



「石盤に向けて…」

皆さんの「石盤」はどんな石盤ですか？

石盤。あなたの譲^{ゆず}れないもの、守りたいもの、ここだけは絶対に離したくないもの、崩^{くず}したくないもの、そこに思いを向けた時、どんな思いが出てきますか？
あなたの中の「石盤」について教えてください。

寄せていただくのは、文章だけでもいいですし、

できれば写真も送っていただければありがたいです。

(110110年11月)

この素晴らしい私が負けてたまるか。絶対に負けてはならない。人の言うことなど聞いていては自分がなくなるではないか。私の思いが正しい。私は偉い。ここだけは絶対に崩してはならない。誰がなんと言おうと私が正しい。

な頑固な私がいました。この思いで生きてきたんだと感じます。どれだけ厳しい自分か。譲る

ことなど絶対にできない頑なな自分の裏には寂しい心がありました。この心を人に見透かされではならないと頑張ってきた可哀そうな自分で

した。

二月の志摩セミナーで番号を呼ばれて岩盤に向きました。
ああ……勝ち目のない闘いをずーっとやつてきました。田池留吉降参です、降参です。負けてな

るものかで生きてきた私には絶対に口に出してはならない言葉でした。でも言えば言うほど温もりが広がっていく。お母さんごめんなさい、田池留吉ありがとうございました。嬉しかったです。この自分を信じていきます。

二月のセミナーでも岩盤に向けての現象に参加させていただいたのですが、まさにその現象はその前から始まっていたように思います。ホテルに着いた早々、学びの友から、夫にと私に渡された物がありました。セミナー始まる時間前なので準備で忙しかったので、とりあえずちらつと見てそのまま預かりました。一日目の勉強が終わり部屋に帰つて一息着いたところで、

預かつたものを再度手に取つて見た途端、「何こ

とたん

れ！」と言う思いとともに、「失礼な！ 私のこと

なんと思つているの？ こんなもの人に渡すか？」

見るからに着古したように見えた。怒りが肉を突き破つて出てくる。抑えきれない思い、「プライドを傷つけられた！」久々に感じた思い。肉はそうだけど私の中は反対に驚きと喜びが行き交う。そのことを関わってくれた友にありがとうの思いで伝えようとしたけど、不発弾？ 二日目の岩盤に向けての現象でプライドに向けて、最終日は怒りに向けて、ムクムクと出てくる、出せる心地よさ！ これからだなど自分と会話。

家では夫。肉は手強いけれど、心を引き出してくれるのには、申し分のない夫です。日々心の体験を経て再開されるセミナーに心を向けていきます。

3

岩盤に向けて瞑想すると、とにかくすごいエネルギーで叫び声が出て、ただただ叫んで、叫んで、叫び続けて、香世さんの「田池留吉に向けてください」の声も聞こえないまま終わる、という瞑想の機会を何回か重ねた。今はそれしか分からない。

それだけではせつかくの機会がもつたいない、何かもう少し掘り下げたい、分からしないなら分かるまで実践しよう、という思いで、機会があれば前に出て、実践させていただいてきました。

前回のセミナーで叫ぶ中で「絶対に負けない!!!!」という言葉が出てきました。誰に、何に？ ……田池留吉になのだと思う。これが抵抗勢力、徹底交戦のエネルギーなのかと思う……とにかくすごいエネルギーだ。ひとつずじなわ一筋縄ではいかないし、ちょっとやそつとじやどうしようもない。どうするんだ、

自分……と呆然とする。甘くない自分の世界を実感する。それでもその後田池留吉に向けると、何

かゆるんで、お母さん、お母さんと涙ながらに呼んでいる。

本当にこの道しかない。真剣に、真摯にこの道一筋にやつていくしかないと想います。

4

学びをして二十六年余り、「自分にとつての岩盤」について問われても、自分にとつて岩盤が何であるのかが分からぬ自分でした。

公開頂いた塩川氏と海外居住者の瞑想動画で共に瞑想しながら、やつと「これかな」と思える自分に気づけました。

「醜いのは嫌や」、「アホなのは嫌や」、「カツコ悪いのは嫌や」、そんな自分でした。総称すれば

プライドとでもいうのでしょうか。そんな思い、そんな自分で。

宇宙と、全てと一体化出来ない。
美醜を捨てて、個という概念から脱却していかない限り愛には帰れない。喜びにも帰れない。

自分の心を解き放つていかなくてはならない。
喜びだけがあればよい。温もりだけがあればよい。全てが溶け合っていく。

そんな自分を目指す。そんな二五〇年であります。

5

我的宇宙を絶対に絶対に崩すもんか

我的宇宙は素晴らしい

我こそ神なり

我的宇宙を崩すもんかという想いが出てきます

さらに、その崩せない思いに向けてみると

苦しかった寂しかった思いが出てきて

苦しかった寂しかった思いとともに

タイケトメキチを思うと

ちつぽけなちつぽけな宇宙を我の宇宙として

きた

真つ黒な宇宙を作つてまいりました

ごめんなさい、お母さん

宇宙を汚してきました

愚かなことをして参りました申し訳ございま
せんでしたという思いになりました

田池留吉を思つて自分の中の岩盤に向ける。
一瞬にして凄まじいエネルギーが噴き出す。
肉、肉、肉、素晴らしい、素晴らしいこの肉、
素晴らしいこの肉、この肉こそ素晴らしい、そ
んな思いが飛び出してくる。

その底に向けてみる。

素晴らしくなければならぬ、私は素晴らしい
くなればならない、ああ素晴らしいければ
ならなかつた……私は素晴らしいければなら
なかつた……苦しい……苦しい……。

泣き叫んでいる自分。

岩盤に向けるたびに苦しみと寂しかった思い
がだんだんと薄れて心が晴れてくるようになり
ます。

ぬ恐怖。

安泰を望み、肉を信じ守ろうとする心＝私は

神なりの心、それが私の岩盤なのか……。

田池留吉、お母さんを思う。

私の中がお母さんを一斉に呼ぶ。

お母さん、お母さん、帰りたい帰りたい、あ

あ帰りたい帰りたい、お母さん

……崩していきます……。

母なる宇宙に帰りたい……岩

盤から切なる思いが響いてくる。

ともに、ともに……。



出した。形の安泰、幸せが目的で、心によぎる
思いは無視し続けた。これでいいんだ、いいはず、
だれも何も言わなかつたら、それでいい、お前
はやるべきことはやつたんだからそれでいい。
何も考えるな……。ずっと、ずっと
とそうやつて存在してきた。何
の疑問も抱かずに、いいえ、疑
問も無視し続けて、当たり前な
んだと、平氣で。延々と。正し
いのは自分だけだと。

なぜ生まれてきたのか。その
問いかけのすごさ、そして、岩
盤の凄まじさ。それがありがた
くて、こんなにすごいことに出
会えたこと、ありがとうござい
ます。はるか彼方かなたの岩盤に思
を向けることは幸せです。この
上ない幸せです。

完璧を求めた。

完璧に答えられない時はこもつていた。

でも、自分が相手の上に立ちたかつただけで、下になるのが嫌だつただけだと思う。

「岩盤」と思いを向けると「恐怖」と出てくる。「絶対手を離すな」と出てくる。「手を離すのが怖い」と出てくる。

自分を守つてきたものを手離すことで、どんな思いが出てくるのか恐怖。

醜い、欲だらけのどうしようもない自分を見たくない。

そんな自分、やる気も何も起こらない。

どうしようもない自分が嫌だつたから形で自分を縛つてきた。

それだつたらやる気がした。

どんどん自分を素晴らしいと思える自分に追い込んでいった。

素晴らしい自分つてなんやろう。

心を動かないようにした。

岩盤。

ここを崩していけなければ、私の学びは何もなかつたことになる、と思っている。

今迄やつてきた学びはここに行きつくまでのもので、この岩盤が崩れ始めてこそが、学びになつていく、と思つている。

だから、今がとても大切。

この岩盤と向き合う勇気というか、決意が大切。何度も何度も、もういいだろうと、どんな思いが出てきても受け止め、受け入れ、タイケトメキチ、本当の自分で包んでいこう、もうそうやっていけるんだと、自分に言い聞かせてきた。

でも、崩せない。

自分の中から思いが出てきそうになる前に、修復に向いていく自分がある。

これではいけないと何度も、自分に言い聞かせても、いざ、その段になると、その場から逃げて、肉の幸せ、安心、安全の方に、エネルギー、自分を使ってしまう。

でも、もう、もう、本当にいいやん。いいやんか。はじめから何もなかつた。何もなかつたのに、自分で作り上げた苦しみの中で、私は恐怖の中で、その幸せを大切にしている。

恐怖。自分がどうなつてしまうのか恐怖。ちゃんと生きていけるんだろうか。ちゃんとこの世に適応していくんだろうか。

ここまで書いて、メッセージ¹⁹⁵³の今も、今もあなたの中から呼び掛けてくれている思い、の方に思いを向けてみる。

自分へのワンポイントメッセージを思い出す。もう決意しようと思った。

合う。

逃げない。

そう、タイケトメキチの目の中で約束した。

9

確かにある。私の中に立ちはだかっている頑強な壁。自分は肉だとする思い、そんじよそこらでは崩せない。

「素晴らしい自分」形を見れば一体どこが素晴らしいのかと苦笑してしまう。周りを見回せば、私より素晴らしい人などごまんといふ。でも私はこの思いだけで突っ走ってきた。人生ひた走ってきた。努力すればなんだつて叶えられると信じたからこそ、人の出来ないようなことも少し

もう、次、次こそは……は、やめようと思う。後がない。その覚悟で大事な場面、自分と向き合った。

も怖くなかった。今こ

こに来て、からだ身体も家族

も大切な人もみんなズタズタにしてきたことを感じる。私は壁を超えると信じていた。壁など最初から無かつたのに。

岩盤、ふと見ればそこには何も無く、さあ、前に進もうと思えばいきなりフリーーズしてしまった。

何も無い世界はただ大きく広がっている。長い長い間に凝り固まってしまった岩盤に、共に帰ろうと呼びかけていきます。



10

今朝、母親と言あらそい争つた。そして帰宅し、ブックさんの録画配信を見ながら改めて「岩盤」に向けて瞑想。今の自分にとって一番の岩盤は、「この学び」と出てきた。「真実の学び。この学びしかない。こんな素晴らしい学びはない。そんな学びをする私は素晴らしい。私は一番。私は正しい。間違っているのはお前だ。我に従え。救つてやる。」

田池留吉を呼ぶ、思う。

「なにもなかつた。元々、なにもなかつた。正しいものなんてなにもなかつた。全て崩して、帰つてきなさい。」

肉の母親は、この聳そびえ立つ、私は正しいといいうエネルギーに気付きなさいといつもいつも演じ

てくれていたのでした。愛でした。やつとその事に気付けました。田池留吉を思う瞑想で、やつと氣付きました。お母さん、ありがとう。田池

留吉、ありがとう。

ない。そうやつて妻を、そして自分を見ない癖がついていたのかもしない。

11

セミナーに向かう車の中で、妻の些細な一言に怒りが噴き出した。心臓が喉から飛び出しそうで、妻に言い返す余裕もなかつた。この数年、日常生活で忘れていたエネルギー。志摩に着くまでに、そんなエネルギーを何度も感じた。

「そびえ立ちの夫婦です。相手の姿が自分の姿です」

以前、夫婦の瞑想の後、塩川さんからもらつた言葉だ。なかなかそうは思えない。妻を見て出てくるエネルギーは真っ黒。できる限り見たく

現象で「岩盤に向ける」瞑想。行きの車の中で噴出したエネルギーに心を向ける。硬く分厚い岩盤。ピシッとひびの入る音が聴こえる。それがあのエネルギー。岩盤があることを気付かせ、ほんのわずかでもひびを入れてくれる。何のために妻がいるのか。何のために学びのパートナーがいるのか。腑に落ちた。

12

思いが口から飛び出す言葉、出さないほうがいい言葉出してはならない言葉がヒヨツヒヨツ飛び出す。

「マズイ!!」と思った時は、もう遅い。
がツと飛び出す！吐く!!

「こんな自分は認められない。愚かな自分をさらしたくない」と、必死に取り繕う。

良い人、正しい人、賢い人、美しい人、素晴らしい人で在らなければならぬ。

愚かで無様で惨めな自分は、許せない。

崩してくださいと訴える自分が在るけれど、それでもこれ以上は駄目よと、ここら辺で食い留めろと足搔き続ける思いが鎮座する。

体型にも拘りが強い。体型を服装で誤魔化す。

中身が無いからあるように見せかける身なりに拘る。

まして老いて尚、崩れる顔。

何とか救おうとシワ伸ばしクリームを、まさ

かの「買つちやつた!!」

鏡に向かつて塗つてみた。

「あれーっ！ 変わらない!!」 悲しいかな。なん

て浅はかな私！

笑つてなんかいられない。笑い事で済まされない、笑つている場合では無い「私の岩盤」。

ああ、でも、こんな恥ずかしい文章を、打てるようになつたんだね。

私のアマテラスよ、ぼんやりの世界から、より鮮明な世界を伝え続けられる様に精進します。

待つていてください。

必ず必ず、ともにともに母なる宇宙へ帰ることを約束します。



さらし」と罵られながらも、名人・円朝としのぎをけずり明治期の落語界を席巻した「落語こだわり人間」です。

8位 司馬嶋 仏教へのこだわり

「シバシマ」——なんて語呂の悪い名前！ 彼女は、司馬達等の娘で、日本に仏教が伝わるや物部氏の迫害を乗り越え、まだ遣隋使も派遣されていない頃に、若干11歳で百済へ渡り、正式に得度を受け、日本最初の僧侶「善信尼」となった女性です。

7位 朴敬元 女性パイロットとしてのこだわり（掲載）

6位 日本最初の天覧相撲 ツチグモ vs 大和朝廷（掲載）

5位 後鳥羽上皇 三種の神器なく即位した天皇のこだわり（掲載）

4位 葛木戸主 国家珍宝帳へのこだわり（掲載）

3位 鉄眼道光 「一切経」出版へのこだわり

江戸時代初期、仏教の經典すべての出版を企画実行した黄檗宗の僧侶です。「死ぬということ」に取り上げております。

2位 角倉素庵 日本で一番美しい出版物「嵯峨本」と天刑病（掲載）

1位 持統女帝 大和朝廷へのこだわり

天智天皇の娘ですが、夫・天武とともに父の造った天智体制を滅ぼし、大和朝廷の礎を築いた女性です。姉の子・大津皇子ばかりか我が子・草壁皇子をも殺し、大和朝廷の存続をはかった政治的こだわり人間です。かなり重い話題になるので1位ではありますが、「箸休め」には不適当と割愛いたしました。

「岩盤に向ける」という特集を出すにあたって、その箸休めとして歴史上のこだわりをコラムとして取り上げてみました。といって「歴史」そのものが「こだわり人」の足跡ですから、それを扱いだしたら、切りがありません。^{あらそ}「争いの歴史」は、結局のところは「こだわりの歴史」のように感じますし、そこで、編者の一人として、自分が関心を持った「歴史のなかのこだわり・ベストテン」を選んでみることにしました。ここでは、^{はんざつ}煩雑さを避けるため、西洋史、東洋史は除外し、日本史に限定しております。また、ベストテンすべてを掲載することもできませんので、以下にその項目だけでも紹介させていただきます。

番外 江戸時代、百姓たちの糞尿へのこだわり（掲載）

10位 望月昭伸 クジラへのこだわり（掲載）

9位 快楽亭ブラック 青い目の落語家

この方はオーストラリア生まれのイギリス人ですが、日本に帰化しているので入れております。お父さんは、明治期のニッポンを取材し「ヤングジャパン」を表したほど名門ジャーナリスト。ところが、息子のブラックさんは、日本で、講談師から落語家の道を進み「真打ち」にまでなった人物。一族からは「恥



西洋人情噺「英國実話 孤児」
快楽亭ブラック口演のポスター

困ったこと、感動したことが、生き生きと書かれています。

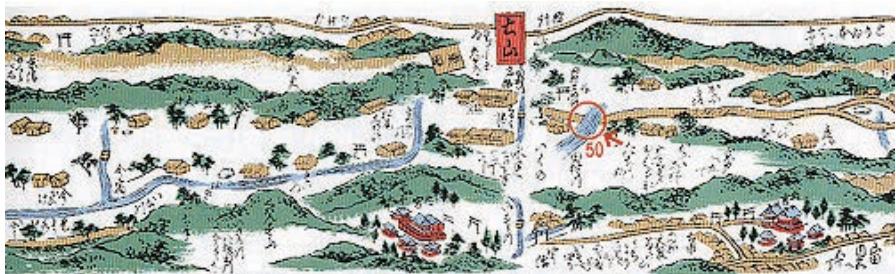
勿論、旅先のトイレのことや、雨上がりの後のぬかるんだ街道を誰が整備したかまで、事細かに書いています。日本人の旅人にとっては、日常的なことで気にかけないことも、彼らにとってはサプライズなことだったのでしょうかね。

まずケンペルの「江戸参府旅行日記」を見てみましょう。彼は東海道の状況を、「木陰となる松の木が街道の両脇に狭い間隔で真っ直ぐに植えられており、降雨時のための排水口がつくられ、雨水は、低い畠地に流れ込むようになっており、みごとな土堤が築かれている」と、街道の状況を描写しています。このため、「雨天続きの時はぬかるんでいる」が、「普段は、旅行者は良い道を歩くことが出来る」ということも観察し記録しています。

また、参勤交代などで、身分の高い人が通る場合は、街道は直前にはうきで掃除され、両側には数日前から砂が運ばれ小さい山がつくられます。万一、到着時に雨が降ったとき、この砂を散布し道を渴かすためだそうです。そればかりではありません。二、三里ごとに路傍に木葉葺きの小屋をつくり、その近くの目立たない側道との間を垣で仕切れます。その小屋は、大名や身分の高い人たちが、休憩したり用便したりするためのものだと思います。

そして、これら道路整備やトイレ小屋の設置を誰がやっているかというと、近在の百姓たちだということです。百姓たちは、ボランティアでなく、自分たちの利益につながるとして、この整備をしているとも言います。

まず、道路の清掃は、毎日落ちてくる松葉や松かさなど、焚き物として利用され、薪の不足を補い、ところかまわず落とされる馬糞は、百姓の子供が馬のすぐ後を追いかけ、まだ温もりのあるうちにかき集め、自分の畠に運んでいきます。すり切れ捨てられた人馬の草鞋は拾い集められ、ゴミとともに焼かれ、灰=カリ肥料として使われるのだそうです。



「東海道張交図会」全 55 景中 土山宿

エーッ、「こだわり」の話じゃなくって「トイレ」の話なんですか？

……いえ立派に「こだわり」の話なんです。

昔、東海道をロケハンで歩いていて、昔の人は、1日どれぐらいの距離を歩いていたのか、また下世話な話ですが、途中で排便の欲求に勝てなくなったらどうするのかとか、そんなことが急に気になってきまして……。

そりゃあ、私たち庶民なら、立ち小便とか、草陰に隠れて用を足すとかするでしょうけど、参勤交代の大名行列の方々は、はたまた旅のお女中たちは、一体どうされていたんでしょうか。

しかし、昔の旅人が「どのようにして用を足していたか」などという日常的で当たり前のこととは、誰も記録に残していないし、広重の浮世絵「東海道五十三次」など見たって、トイレや用を足してるとろなんか描かれていませんしね（笑）。だから、この調べごとが、結構、やっかい厄介なんですよ。

ところが、ところがです。これが当たり前でない人たちがいた。「外国人」あるいは「異邦人」と呼ばれる人たちです。

彼らは、好奇心満々で、日本人の一挙手一投足に目を光らせました。そして、それを紀行文に書き残したんです。ケンペルしかり、ツンベリーしかり、シーボルトまたしかりです。今ならブログにでも書くんでしょうが……彼らは、それらのことを「江戸参府旅行日記」「江戸参府隨行記」「江戸参府紀行」などの日記に書き残した訳です。どれをとっても、彼らのびっくりしたこと、

これがツンベリーになると、もつと悲惨です。彼は、肥溜めを「穴」と称し、「その穴には農夫が根気よくせっせと集めた糞尿が蓄えられている。農夫は自分の耕地を肥沃するためにそれを使う。しかしその多くは通行人が吐き気を催すような堪え難い悪臭を発する」と、その臭いに苦しめられ、「鼻に詰め物をしたり、香水を振りまいても、まったく無駄なくらい強烈である」と、ため息をもらしています。

東海道だけではなく、旅人たちの行き交う街道に設置されたこぎれいな公衆便所——これこそは、お百姓さんたちの肥料に対するこだわりが作り出したものがありました。

「肥料くらいのこと」などと笑わないでください。

近世以降、日本農業における肥料のなかで「人糞」はとりわけ貴重なもの。このため、都市近郊農村では屎尿供給をめぐる騒動が絶えなかったほ

どで、「小便」だけでも大根などの野菜と交換ができるというのですから、それを専業とする行商人まで登場したほどです（上の図）。

さてさてトイレに対する疑問は解決しましたが、話まで臭くなってしまったので、「臭いものには蓋をし」、お話をうも、この辺でお開きとさせていただきます。



さて、大名や高貴な人たちのトイレが、農民たちの手で、二、三里ごとに設けられていることは分かりました。

では一般庶民のトイレはどうだったのでしょうか。ケンペルは、そういった庶民のトイレも百姓たちが自費でつくっていたと言います。それも競って、自分のつくったトイレを旅人に使ってもらおう

としたようです。特に女性用のトイレをこぎれいにつくり、女性が安心して入れるトイレづくりを目指しました。女性が安心して使えるようなトイレは、利用者が増えるということらしいのです。

当時の旅人の糞尿は、大切な肥料になります。旅人たちは、少なくとも自分たち百姓よりうまいものを食っている。ということは肥料としても価値が高いと言うことになるわけです。そこで、この糞尿を少しでも多く集め、灰などと混ぜ合わせて肥料にするという次第です。

しかし、トイレはこぎれいでいいのですが、それを集めて蓄える肥溜めまでは、百姓たちも気がまわらなかったようです。

ケンペルは、百姓たちのことを「欲得ずくで不潔なものを利用する」と評し、「田畠や村の便所のそばの、地面と同じ高さに埋め込んだ蓋もなく開け放しの桶の中に、この悪臭を発するものが貯蔵されている。百姓たちが毎日食べる大根の腐ったにおい（タクアンのことか？）がさらに加わるので、新しい道がわれわれの目を楽しませるのに、これとは反対に鼻の方は不快を感じずにはいられないことを、ご想像いただきたい」と、冗談混じりに訴えています。



上野山の辻雪隠（公衆便所）

て気がつきました。

何かにつけて瞬時にできる岩盤です。

自分の岩盤は何だろうと考えてみると、いろいろ思い浮かんできます。

自分の性格を分析するときちんとしたことが好きです。

突き詰めると自分がルール、法で自分の思い通りにしたかった。

全ての事にその思いがありました。

当然そんなことは出来ない事が多いので、心の中で文句を言っています。

己偉い自分とはこういう事なんだと学びをし

我に従え、我に従え、我は正しい。この思いに背く者、逆らう者はすべて抹殺。
許すもんか、絶対に許すもんか。怒り怒り瞬時に飛び出すこのエネルギー。

正しいことを伝えてるのに何でこんなに苦しいんだ。おかしいだろう。

答えは簡単、間違っているから、自分を肉だと

する思いはすべてを破壊する自滅のエネルギー。
じめつ

肉では分かつてゐる。肉では分かつてゐるけど
中が許さない。三億六千年積み上げてきた意識が
許さない。

固い固いこの塊かたまりでも固いと思つてゐるのは肉
で、意識はそうではないよと伝えてくれる。私は
そんなに固くないよ、そんなに強くないよって。

ただこの思いを素直に出したいんだ、思いつき
り出したいんだ。なんだかこの思いが愛いとしき思え
た。ともに帰ろうと思えた。



己偉し

母の奪い合いだった。天照の奪い合いであり、錦の御旗の奪い合いであり……。天照の奪い合いで負けた自分は敗者だった。敗者には何の権利もない。それが肉の論理だった。

その論理を田池留吉に対して使っていた。学びを始めて間も無く、先生の言う事が正しいと思つた。即ち基盤が違う、肉が基盤ならば不条理なことも、意識を基盤とすれば理路整然としている。それを実証するのは容易なことだつた。敗者の時点で、私は田池留吉に負けたのだつた。敗者は勝者に従うしかなかつた。学びに肉の論理を持ち込んで、田池留吉の正しさに不本意ながら（勿論その自覚はなかつたが）従つてきたの

だった。学びが進めば進む程、その正しさは立証され、その先にある次元移行も間違いのないものだと思わざるを得ない。しかし、私はそれについてはいけなかつた。何故ならば意識の転回が進んでいないからだつた。どこまでも頭脳（肉）で学ぼうとする自分には喜びも温もりも感じられないのだった。「己偉い人には学びはできません」の言葉通りの道を辿つていた。そして、敗者の思いを持つたまま学ぼうとしている自分には、田池留吉に素直になることなどできようはずがなかつた。悔しさも、怒りも、苛立ちも全て封じ込めて面従腹背そのものと化してセミナーに集い続けていたのだつた。当然の事ながら、闇出しもできなければ、田池留吉を思う瞑想もできなかつた。唯々悔し紛れに叫び続けるしかなかつた。何と哀れな自分に成り果てたことか。それもこれもみんなあいつのせいだつた。この思いを素直に吐き出していきたいと今

思っています。やつと吐き出せる時がやつてきましたのだと嬉しく思います。本当に長かった、苦しかった。

学びを始めた頃、セミナーの会場外で先生に出会うと、すっと立ち上がりつて直立不動となり礼をなさる、そんなことが何度もありました。今、その先生の姿を思い出し、どれほど己偉い自分に気付きなさいと促されていたことかと、そこから私の学びが始まるのだということを教えてくださつていたのだと素直に思うことができる様になりました。本当にありがとうございました。

この思いを出しながら、アトランティスの間違いはこれ（己偉い心）だつたという思いも同時に感じていた。「アトランティスの悲劇」が学びのきっかけとなつた私にとって、愚かな肉の思いだと知つてはいても、アトランティスでの間違いを解明したいという心を無視することが

できなかつた。それはアトランティスに限らず、過去から何度も繰り返してきた間違の原因が何だつたのか、それを知らずにはいられないとう思いでもあつた。それは過去世の供養であり、また、肉の世界への執着から手を放していくことでもあつたのだと今理解しています。



で丁稚奉公のよう^{でつちばうこう}に働いていた時期でした。二人ともに金がない。そこで夜は、二人でカップラーメンをすすり、翌早朝には海へ出てザトウクジラを探し撮影するという日々が続きました。

「私はクジラの撮影ではひじょうにツイしていく、初めの年から6頭の交尾集団の撮影に成功した。巨大なクジラの雄たちが雌を争ってくりひろげる戦いのすさまじい迫力。そのときの強い印象が、クジラの撮影が、私のライフワークとなるきっかけだったのだと思う。クジラの撮影をしていて、彼らの巨大さを思い知らされるような体験を何度もしている。あるとき、クジラが私たちの小さなボートの真下で鳴いていた。歌うような不思議な鳴き声が海面から響いていた。水中マイクを通して水中に入ると、クジラの鳴き声が電気のような衝撃となって、ビリビリと足の先から頭まで走った。まるで海全体が鳴いているようだった。」（望月昭伸さんの述懐）

翌日、森田さんの持ち舟「韋駄天Ⅲ」に乗船させてもらい、小笠原の海へ乗り出すことになりました。そこで、いよいよ、望月さんの遭難についてのお話しをお聞きすることとなつたのです。



森田船長と乗船させていただいた「韋駄天Ⅲ」

今回は、小笠原近海で、ザトウクジラの撮影中、
行方不明となった日本初のクジラ写真家・望月
昭伸さんのこだわりを追いかけます。

真っ先に向かったのは、二見港のすぐ近くに
ある小笠原ダイビングセンター。写真家・望月さんが小笠原の鯨類撮
影のベースとしたダイビングセンターです。このオーナー森田康弘
さんは、望月昭伸さんが小笠原を訪問した頃からの盟友です。

当時は、日本のクジラを撮る人間はまだ誰もいませんでした。そこ
へ「日本の鯨類を撮るのに一番いいのは小笠原ではないか」と、望月
さんが小笠原ダイビングセンターの先代社長を頼ってやってきたので
す。先代の社長も、「来年からは、この小笠原でホエールウォッチン
グがはじまる。ぜひ一緒に盛り立ててほしい」と、望月さんに協力を
約束したと言います。これ以降、毎年、一ヶ月から一ヶ月半ぐらい、
クジラの生態調査を含めて船を出すことが決められました。その相棒
が小笠原ダイビングセンターに勤めたばかりの森田さんだったという
わけです。しかも、望月さんが小笠原滞在時は、相棒の森田さんのア
パートに居候を決め込むという状態でした。というのも、望月さんは
独立してまもなくの頃で、子供さんも小さく、要は取材費用にもこと
欠く状態だったので。森田さんは森田さんで、好きなダイビングで
飯を食うため、東京の自動車会社を辞め、小笠原ダイビングセンター



彼は寄り添って撮るカメラマンではない。思いっきり近づいて撮るタイプのカメラマンです。クジラは、足びれを止め浮いているだけの者は敵とみなしませんが、スピードを上げ近づいてくる存在は敵とみなす習性があります。遊び心のあるクジラで、それを許すものもいますが、執拗に付きまとわれると、胸ビレを大きく振って追い払う場合だってあります。ゆっくりな動きですが、それでも海の中で電信柱を振り回しているようなもので、撮影に夢中になっていたりすると、この胸ビレの直撃を受ける場合もあります。おそらく望月さんの事故はこういう状況だったのでは、と思われます。」

「韋駄天Ⅲ」に乗船させてもらい、森田船長のお話を聞かせてもらい、望月さんの最期の様子も、おぼろげながら想像できるようになりました。小笠原の海は、まるで夢のなかの出来事のようで、気づけば5時間近くセーリングしていたことになります。

いよいよ下船——現実に帰る時間がせまってきたようです。





「クジラの棲む青い地球—望月昭伸写真集」から転載

望月さんはクジラに対して恐怖心を持っており、潜るときも「気合いを入れないと怖くて撮れない」と常々語っていたと言います。

「望月さんはクジラに対する恐怖心を押し殺し、自分を奮い立たせ果敢にクジラに向かっていくんです。泳ぎ方も非常に早いです。僕なんかは、できるだけゆっくりと泳ぎ、クジラに向かう角度も、クジラと平行に泳いで、クジラにプレッシャーをかけないようにします。これに対し、望月さんは、クジラに対し向かっていくんです。こういったことをおもしろがるクジラも確かにいるし、こういうクジラに出会ったときは、実際に良い写真が撮れるんです。

水中では地上みたいに望遠レンズが使えません。水の透明度もその年によって違うんですが、透明なときでも水の中は深くなるほど暗いし、望遠を使っていたら、泡や浮遊物ばかりが写って肝心のクジラを撮ることができないんです。だから望遠ではなくワイドレンズを使い、思いっきり近寄っていって撮るんです。思いっきり寄つて撮れた写真は、クジラの描写が、今まで見たことのないような鮮明さで写ります（上は、望月さんの写真「ザトウクジラの親子」）。

き落としてきたと、いうことも知りました。

私の岩盤、それは「決して許すもんか」というエネルギーです。

私に歯向かうもの、刃を向けるものに対し、やられたらやり返す、目には目を、歯には歯を

のエネルギーです。このエネルギーは、殺戮と破壊、そして闘いのエネルギーでした。許してしまつたら私はダメになつてしまふと思い、凄まじいエネルギーを膨張し続け頑なに崩すこと

を拒んできました。

このように凄まじいエネルギーは、遙か、遙か、遠い、遠い宇宙時代から流し続けてきたエネルギーだということを、今世、田池留吉の意識と出会い、眞実を学ばせていただくことで知りました。この凄まじいエネルギーで自分自身をもズタズタに切り裂き、自らを苦しみの奥底に突

瞑想で感じる喜びと温もりの波動の世界の中に溶け合っていくことを体感し、実践を積み重ねていくことで少しづつですが、私の中の岩盤を崩していく手ごたえを感じられることが嬉しいです。

眞実を学ばせていただくことの喜びと幸せが広がっていきます。

眞実の意識、田池留吉の肉との出会いに心から感謝の思いでいっぱいです。そして、必死の思いで今世まで繋いでくれたたくさんの自分に

ありがとうの思いでいっぱいです。

今世の肉の終わる瞬間まで、思うは田池留吉一筋の道を喜び喜びで生き続けていきます。

こうして思いを綴らせていただく機会をありがとうございます。

長い長い年月岩盤を作り、大きく大きく広げ、その岩盤ってどういう事なのかも分からず、我こそはの世界に生き続け、自分は絶対に正しくて、譲れない心で生きてきました。

なぜそんなに頑なに自分を誇示しなければならないのか、我こそはと前に出て譲れない心はなぜなのかと自分に問うております。共に生きてきた立派な自分、結局はアマテラス……崩しても崩しても心の奥の底の底にある、ああ共に、共にお母さんの優しさ、温もり、喜びに帰つていこうね。帰れるんですよ、帰つていこうね、愛に帰つていこうね……

愛等いらぬと、どれ程自分の心を、粗末そまつにして自分に歯向かつてきましたか分かりません。

愛をぶつた切つて、ぶつた切つて、そして、愛を求めて、求めて探し続けて、漸く漸く今世お母さん

さんに願い出て、この肉を頂きました。そしてこの日本の地で田池留吉に出会わせて頂きました。そして私達人間の本質は、意識、波動、エネルギーですよと学ばせて頂き、『私はあなた、あなたは私、一つ』と伝えて頂きました。ミラクルです。本当に千載一遇のお出会いを頂き幸せです。

母なる宇宙、母なる宇宙、ああ母なる宇宙の中に、生かされていた、母なる宇宙の中に沢山沢山の私の宇宙が許され、愛され、受け入れられていて、有り難う。唯々有り難うの思いで一

杯です。

私は波動、エネルギーなどと、これから確信の道を広げて二五〇年後に向けて参ります。有り難うございました。

18

私の岩盤は何なんだろうと思いを向けてみました。どうしても触れたくないという苦しい思いを感じます。肉で生きてきた自分を守り続ける為に離すことが出来ませんでした。真つ暗闇の中をどうすればいいのかわからず、戦うことしか出来なかつたんです。苦しかつた、怖かつた、寂しかつた。こんな私を生んだ母を恨んできました。そして私は真っ暗な宇宙を作り続けてきました。我一番、我に従えでした。この思いが苦しかつたんで

す。もうやめにしませんか、緩めていきませんか、と自分に呼びかけました。嬉しいです。嬉しいです。こんな私にも嬉しいという思いがあつたんですね。冷たかつた自分に、ごめんなさい。守るものなんか何もなかつたんです。全て自分の一人芝居でした。本当の自分にありがとう。真っ黒に汚してきた私の宇宙だけれど、たくさんのおとと共に母なる宇宙に帰ります。本当にちっぽけな自分を感じました。ありがとうございました。

19

私の中の岩盤に思いを向ける。

いつもいつも上がってくる思いは「私は間違っていない、私は正しい」の思いです。

私が間違っているわけがないじゃないか。だつて私は素晴らしいんだから当たり前だ。

人から間違ってるよと言わせはしない、ましてや自分から間違っていると口が裂けても言うわけがない。

だからいつもいつも完璧でいなくてはならない。私が私るために崩してはならなかつた。ここに私の存在がある。崩してしまえば私の居場所がなくなる。だから崩すことが怖かつた。私は肉だ。私は肉だ。その思いが「岩盤」でした。田池留吉を思つてみる。

私達は肉ではないよ。意識だよ。愛だよ。ともにともに愛に帰ろう。

しつかり自分に伝えていきます。

意識の世界、「ごめん、嬉しい、ありがとう」

だけです。

意識の転回一直線、まっしぐらにな。「はい。」素直な思いが嬉しいです。素直になつていきます。

昨年十二月末の「ともに瞑想会」の後半で「岩盤に向けて」の瞑想があり、最初は指名によるもので、該当しませんでした。機会があれば飛んで出たいとの思いがありましたので、次に塩川香世さんの「希望する人」の声に、通常であればヨツコイショと出ていく私ですが、この時はサッと前に出ました。

常々肉の思いが強く、意識の転回がなかなか出来ない私ですが、岩盤に思いを向けてみると、巨大な岩盤が覆いかぶさつている感じです。岩盤の正体は自分では意識していないつもりの「」一番、私は間違っていない、聳え立つ思いが出てきて押しつぶされそうになりました。今回の瞑想でしつかりと握っていたもの=岩盤=を感じました。

肉の思いが強く意識の転回がはかどらない私で

すが、ドリルやハンマーで岩盤に穴をあけるので

はなく、内なる田池留吉に思いを向ける瞑想を通じて針の穴程度でもあけたいと思つております。ありがとうございました。

ありがとうございます。

ずうつとずうつと間違つてきました、申し訳ありません。ごめんなさい。ありがとうございました。

21

欲、欲、欲……。

もつと、もつと、より良く、と欲がつきない。もつとこうしないとああしないと、と、現状に満足出来ない。喜べない、素直に喜べない。

22

欲は肉です。私は欲のかたまり塊です。でも嬉しいです。

ずうつと、形が整う事が素晴らしいと信じ、外の目が気になり、自分の中の思いを無視してきた。氷のように冷たい心。気付いて、諦めないで歩いていく。思いを向けると、うれしい、お母さんありがとう、生まれてこれて、思える時間がある、ありがとう、幸せな空間、時間を、

以前と比べ自己を主張することも軽減されていると甘い甘い愚かな思いの私にとつて、ここだけは何が何でも譲れない、何億年と真つ暗闇の中でのたうち回つてきたそれはいつたい何だろう。肉が自分？この思いこそこびり付いている岩盤か？いやそれだけではない、それ以前の私は何を主張して田池留吉に刃向つて愛なんてくそくらえとしてきたのか、学び初めの動機に戻つてみた。救いたい救われたい、私は正しい、

私は素晴らしい、我に従え、前に出るな、一番

一番一番でなければならぬ、パワーだ、パワー

をよこせ、田池留吉を上に置いて己を満たすこ

とに専念してきた。満たせるものなら面従腹背
なんてちよろいもの、肉では必死で学んできた

と思つたが根底にこのどす黒い思いを忍ばせて

きたのだ。でも根底に渦巻く暗闇は途轍もなく

膨大だ。時に突然何とも言えない閉塞感を感じ

させてくれる。やつぱりこの思いのすべてが「あ

なたはなぜ生まれてきたのか。本当の自分を知つ

ているか……」に繋がる。ここが全く分かつて

ないから私は愛、あなたも愛、ひとつを嫌い「己」

という思いに固執して、正しい正しい悪いのは

あいつだこいつだと責任転嫁をよしとして自分

の心を見ることをしてこなかつた。その思いが

岩盤になつてゐると思えた。

私の譲れないものは、それは正義感だと思います。若い頃は、白黒はつきりしたかつた。その心癖は、今も根強く染み付いています。

一月志摩セミナーで、「岩盤に向けて……」番

号を呼ばれて前へ出た時、瞑想の中で目の前の

スクリーンいっぱいに大きな岩盤がドーン……

と出てきて二人の自分がいて、一人の自分は、「崩

したくない。崩したくない。崩したくない」と

必死で叫び、もう一人の自分は、「どうしてなの。

どうしてなの。どうしてなの」と尋ねていました。

セミナー帰宅後、この岩盤はどうしたら崩せる

ものか?と真面目に考えこみました。(鉄板より

はまだましかとも思いました)このぐらいにし
ないと、他力ガチガチの自分には、納得しない
から、そう思うとよくぞ出てくれた。有難

うです。最近、娘と行動する時、知らず知らずのうちに我に従えの思いがすっと前へ出て一言二言口走ります。目を開けると心の針は、ぐるぐる回りはじめ目を閉じると、心の針は、やつと止まります。本当の自分を、捨て忘れ去り、外へ外へと他力を求め続けまくり、やつと。やつと。やつと。やつと……。

本当の自分の存在に気づけつつある「今」それが嬉しいです。
「最後は、正しい瞑想です。」
本当に、それに尽きると思います。

前ら役所はいつも偉そうやな」と答えてくれたら良いだけやん」「規則ですのです。待っておられる方もいらっしゃいますので」「お

任を持って、人に迷惑をかけるな（嘘をつくな）、一方的に自分の主張や要求をするな、そして、金財産。

自分がどうしても守りたいもの、譲れないもの、「岩盤」思いを向けると出てきたものの、約束、規則を守れ、自分の言ったことには責

偉そうといわれる僕が、こんな光景を見ると我慢できないのです。それが、お母さん、田池留吉と思うと、スースと別の世界が広がつてくる、何もない、喜び温もりだけの世界。ああま

だ肉をしつかりつかんでいる、少しづつでも放していきたい、そう思う日々です。

どんなにしても放せない、どうしようもない程

掴んでいる。何故掴んでいるのか、どうしていつまでも、いつまでも、掴んでいるのか。

自分で自問自答を繰り返す。段々やつていくう

ちに、結果が出てきて嬉しいと思ったのも束の間、気が付いたら元へ戻っている。何故、どうして、繰り返し、繰り返し、反省と瞑想しかない。

自分の心を見ることしかない。私は愛に蓋をして、闇は即座に心のひだに押し隠し、私は太つ腹、腹芸が出来る、懐が深いとうそぶいてきました。

肉の自分だけを本当の自分と握って掴んで、聳え立つことしかやってきませんでした。

我こそは己一番の宇宙の神なり、我こそは己一番の教祖なり、我的前に頭を垂れよ、我に従えと大きな顔をして平然と聳え立つてきました。己偉い私が聳え立つていては、眞実は何一つ分かりませんでした。自分の心をしつかりと、掘り下げて、掘り下げて、根っこまでたどり着く反省。私はこれができませんでした。

自問自答するうちに、中から過去世が語つてくる。

「うるさ〜い、黙れ黙れ、黙れ、このわしたちが、こいつの身も心も手も足も、目も耳も鼻も口も全てわしたちが操つてやつてきた。」「これはわしたちの操り人形だ。」

「こいつは、身も心もがちがちに縛られて自分で何一つ何もできない。このわしたちの思うがままだ。」

「すべてわしたちが操つて、やつてきてやつた。崩すもんか、崩せるもんか、崩されてたまるか。」

愕然がくぜんとしました。

今日のライブに参加させていただきました。今までには、とてもとても心に響いてきました。夜、岩盤の原稿を書こうと思つて瞑想しました。

私の過去世が語るには、「ともに瞑想を」の中で、塩川さんの異語が心に響き、「間違つてきました、々、……間違つていた、々、……、わしたちは、愛へ帰りたい、々、愛へ帰ろう、々、々、お母さんが呼んでくれている。わしたちは愛へ帰れるんだ。」

「みんな愛へ帰ろう、愛へ帰るんだ。わしたちは、一度とこの者を操ることなど決してしない。」
今まで二度と操ることなど決してしないといながら、又操られていました。これが綱引きと言っていたことかなあと思つたりしました。自分の心を見ることなくして、自分の間違いに気付けることなんて有りませんでした。過去、未来全ての意識が今の自分とともに、愛へ帰る

道を只ひたすら心のふるさと母なる宇宙愛へ帰る道へといざなわれていることを心から喜んで、真剣に、ひたすら歩いていきます。

26

昨年の「ともに瞑想会」で岩盤に向けた時、思ひを出せない、がんじがらめの私でした。誰のせいでもなかつたんです。いつもいい子で、優等生を演じていたから、苦しかつたのに理性で抑え込んでいました。

セミナーの動機が間違つていた事さえ気付けず、セミナー参加でした。

今世ほど恵まれた肉の環境にどつぶりでしたので、心を見ているのは、うわべだけでした。田池先生と出会った時「あんた真面目やなあ」と言われた時、「そんなことないです」と答えて

いましたが、私の岩盤は眞面目というか几帳面なことです。出てきた思いは全て、きちんとしないと自分自身が許せない思いが出てきました。良かつたです。この許せない思いが、いとしいです。苦しんで、苦しんできた自分にごめんなさいです。少しずつ、でもいいから二五〇年に繋げていきます。最近は自分では考えられない言動に、肉ではないエネルギーだと感じる現象を貰つています。有難うございました。

私にとつての岩盤と思いを向けると、宗教と出てくる。神、神、神……。私は神を求めてきた、神を求めてきた。そんな自分がたくさんいて、命がけで神を求めてきた沢山の自分が、タイケトメキチを跳ね

返すシールドを命がけで張つているのを感じる。必死にシールドを張つているが、中は猛烈に苦しいのがわかる。あー、本気で溶かしていきたい。ぬくもりを届けたい、頭では届かない、波動のみが伝わっていく世界。若くしてこの学びにながつた私は、今世こそは、宗教にまみれなかつたが、過去世は宗教ずくめだ。神を求めてきたこの過去世たちが、必死になつてこの学びにないでくれた。今世こそ、真実を伝えてくれ、この地獄から救つてくれ。自己供養、先生はそう言つた。その為に生まれてきた。このシールドの中にぬくもりだよ、どその波動を伝えたくて生まれてきた。はい、その時間をしつかり持つてください。そうでした。心を外に向けて肉の自分を満たすために奔走^{ほんそう}してきた。心を中に向けてください。コロナウイルスはそう伝えてくれている。その時間をしつかりと持つてください。私の中も、私の周りも、待つていて。温か

な波動が流れてくることを待っている。そうでした。本当にそれだけでした。ありがとうございます。

る思い。幾重にも塗り固められた、強固な、岩盤。

私の中にある岩盤に思いを向けてみました。

天変地異や、周りの人、自分の肉の生活を脅おびやかすもの、肉体生命奪うばい取るもの、目の前に迫つてきたら、みんな敵だとし、恐怖、怒りが出て、瞬時に自分を守る思い、死守する思いができる。

心の底に、肉本物、死んだら終わりという思いがしつかりと固まっている。

だから神に救いを求め、そのパワーを身につけてきた。すさまじい攻撃のエネルギー、何億年と転生の度に塗り重ねられてきた肉を本物とす

田池留吉の目を見る

素直な思いで田池留吉の目を見ていました。田池留吉の目の中に広がる世界、ああ、「ここへ、ここへ帰ってきてなさい。待っていますよ、待っていますよ。ここがあなたの帰る世界ですよ。」

この波動の中にいることを感じて、しつかり自分を見つめるんですよ。そして自分の間違つたエネルギーを出してあげて下さい。解放してあげるのです。

お母さんの思いを感じ、田池留吉を思う

ああ、田池留吉、アルバート、お母さん、ごめんなさい。

こんな優しい中に、温かい中に、いたんですね。間違っていたんですね。

ああ、お母さんを、忘れてきました。田池留吉の目を見ないように、自分から背けてきました。自分を知るのが怖かつたからです。自分のおぞましい姿を受け入れられないと思つてきましたから、逃げて隠れました。

お母さんの目は優しかった。お母さんは、どんな私でもいいと言つてくれているのですね。肉を自分だとして、その目で、勝手にお母さんを、小さく見てきたんですね。こんな私を受け入れてくれるはずないと、そう思つてきました。ですね。それが間違いの原因でした。

大きな大きな広い広い無限大の世界、それが、田池留吉の世界、アルバートの世界、母の思いの世界でした。大きな世界に、小さな真っ黒い塊かたまりをたくさん作つてきました。苦しみだけの世界でした。

この広い中にひとつだと言つてくれるのですね。肉を自分だとする思いが岩盤を作つてきました。岩盤は、岩盤ではなかつた。だから、優しい中に溶とけていけるのですね。喜び喜びがあなただと言つてくれるのですね。ありがとうございます、ありがとうございます。

お母さんの優しさ、その中にいます。お母さんは待つていてくれたのですね。

私達もお母さんの元に帰りたい。帰りたい。帰れるんですか。帰れるんですか。

岩盤の自分ありがとう。あなたがいてくれたから今こんなに幸せ喜びの自分があります。帰れるんですよ。一緒に帰りましょう。お母さんを思い、田池留吉、アルバート、母なる宇宙を思いましょう。みんなひとつの世界にありました。帰りましょう。

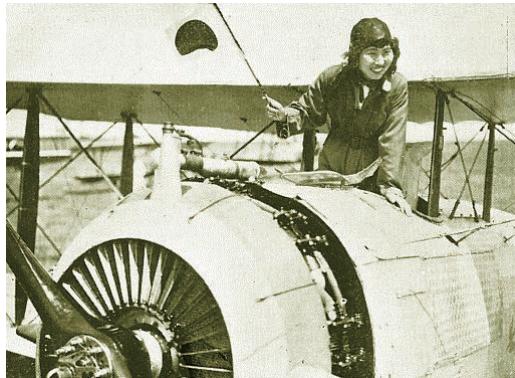
報知新聞記者・磯村春子が記者魂をかきたてられ乗り組んだのが、日本における最初の飛行だったと言われています。

そこで朴敬元についてみ

ると、彼女は 1897 年 6 月

24 日に生まれ、1925 年 1 月、東京蒲田の「日本飛行学校」に入学して操縦を習い、1927 年 1 月には 3 等飛行士の免許を取得し、翌 28 年 7 月には、「木村シゲノ」「今井小まつ」に続いて日本で 3 人目の女性 2 等飛行士になりました。当時、日本では、1 等飛行士には男性以外なれなかつたし、世界中探しても、女性飛行士は数十人しかいない時代でした。それも儒教思想の強い韓国の女性が、植民地の支配国である日本に渡って飛行士になるなど、それだけでも驚嘆に値します。

当時、日本で操縦練習するには莫大な費用がかかりました。500 円あれば家一軒が建つ時代に、3 等飛行士になるだけで 2000 円がかかるとされていました。このため、これまで、朴さんることは「金持ちのお嬢様の遊び」だとか、「韓国の某大臣の 2 号さん」だとか言われてきました。しかし実際は、韓国の貧しい家具職人の家に 5 番目に生まれた娘だったのです。



サルムソン 2A2 型機に乗り込む朴敬元さん

「青燕」という韓国映画があります。韓国では2006年の正月映画として公開されたらしいのですが、日本での公開はありませんでした。しかし、その韓国でも「親日的だ」という理由で興行的にはひとつパッとしなかったようです。

映画は、韓国初の女性パイロット「朴敬元」のお話です。普通ならサクセスストーリーで終わる話なのでしょうが、不幸にも彼女の生きた時代が激動の時代でした。彼女が9才の頃、日本による韓国併合があり、彼女が事故死した前年、満州事変を経て満州國が成立了。しかも彼女の留学先が、蒲田にあった東京日本飛行学校。飛行士となってから、女性としては初めての「日本海横断飛行」に挑みますが、折からの台風接近に「回航せよ」との命令をも無視し、「決行する」という言葉を残し消息を絶ったのです。

「日満親善」がオモテ看板にあり、しかも日の丸を振りながら「青燕」と名付けたサルムソン 2A2型複葉単発機に乗り込む姿は、同胞の韓国人女性から「民族の魂を失ってしまった」と評されたものでした。

ところで、飛行機で最初に空を飛んだ女性は、フランス人レイモン・ド・ラロッシュ。彼女は、1909年10月22日、骨組みむき出しの翼を持つ飛行機で、5メートルの高さを2,300メートル飛んだと言います。ちなみに日本で最初に空を飛んだのも女性だったと言います。

1910年9月9日、山田猪三郎考案による飛行船の浮揚実験に、

やがて 28 才になって、ようやく日本飛行学校に入学します。当時の 28 才と言えば、中年を越えていますが、その間、必死の思いで資金作りに励んだようです。

さて朴敬元の遺稿に「青空礼賛」と「わが女流飛行家は何故伸展しないか?」の 2 編がありますが、そのなかで朴さんは「過去を顧みれば苦しい鍊磨の連続。楽しい日は幾日あったろう」と、その思いを語り、そして「何物も欲しくない。ただ自分の足跡を残したい一心だけだ」と言い切ります。

ここに彼女の思いが集約されているように思います。日本帝国主義の犠牲者としてではなく、激動の時代の中にあって、「自分の足跡を残したい!」という思い。これこそ彼女の、心の底からの叫びのように思えます。韓国からも、日本からも受け入れられず、それでも日本の国策を背負い、女性初の日本海横断飛行に挑み、朴さんは、箱根を過ぎたあたりで消息を絶ちました。その後の調査で、朴さんは、その操縦するサルムソン 2A2 型複葉単発機が、伊豆半島北東部にある「玄岳」に激突して亡くなつたことが判明したのです。

なお熱海にある「韓国庭園」には、今も朴敬元さんの記念碑があるそうです。



サルムソン 2A2 型機 各務原航空宇宙博物館



しかも 5人が5人とも娘で、敬元は最初、韓国語で、「残念だ」とか「恨めしい」とかいう意味の願桶ウォントンという名前を付けられました。つまり待ち望んだ男の子でなくて、またも

女の子が産まれ「残念だ、悔しい」ということらしいのです。彼女もこの名を嫌い、自らの意志で敬元と改名しています。

1917年夏に父親が死ぬや、敬元は、その年9月、信明女学校を退学しています。退学理由は「財政無故」、つまり学費が払えなかったということです。そんな貧しい家に生まれた娘が、日本に留学したのです。最初から「日本飛行学校」に入ったのではなく、日本を知るためでしょうか、職工養成を目的としてつくられた「笠原工芸講習所」に入っています。日本の職工養成所を出るや否や韓国に戻り、今度は、慶尚道大邱の看護学校に入り、看護婦をすることとなりました。女性の職業が限られていた時代、看護婦は、女性が経済的に自立できる数少ない専門職の一つだったようです。日本の女性飛行家の中にも、飛行学校に入る前に看護婦をしていたという女性が何人もいるようです。親からの仕送りに頼らないで、なんとか自力で飛行家になろうとした女性たちだったと言います。朴もその一人でした。

岩盤に向ける瞑想で出てきたのは、幼い頃の自分の思いだつた。恐怖と不安がとても強くて「神様、仏様、助けてください」といつも併んでいたような記憶がある。その自分の中から溢れ出てくる思いを私はただただ封印したかった。小さい頃の方が敏感だつた。今は肉に塗れて胡坐をかいている。まだまだ全然自分の本質にも辿りついでなかつたんだなど確認できた。ここが少しでも柔らかくならなければ、今世生まってきたも自分のやるべきことを果たせなかつたということだなと感じた。田池先生が伝えてくれたこと



を真剣にやつてきた自分にとつて、この事実は認めがたく目をそらしたことだつたけれど、そうしている限り肉体時計を無駄遣いしているということなんだと思った。田池先生が一番伝えたかつたことを無視してきた。「やつてるやつてるって、何をやつてたんや」つて先生に言われそうな気がする。そして「やつと気付けたな」つて。

人に良く思われたい心

人に良く思われたい。そのためには自分の思いをぐつと飲みこんできました。

思いにしつかりと蓋をしてぐつと抑えるエネルギー。もう上から金づちでたたかれようがび

くともしないしない壁を死守してきました。

これを言つたらすべてが崩れてしまう。私さえ耐えて我慢すれば周りに争いごとがなく、うまく回つていける。私さえ私さえと耐えて忍んで本当におしんのように生きてきました。

苦しい思いをぐつと飲みこみながら、何にも苦はないと顔は平静を装つてきました。

肩に力を入れ心の中は相手と戦い殺してきました。こんな思いでいればいつかは病気になると心の中は叫んでいたのにその声に耳を傾げずした。当然の事でした。

今ようやくその分厚い壁にほんの少し穴をあける心地よさを味わいたいと思うようになつてきました。

優しい思いで心の叫びを受け入れ、肉体細胞の思いが聞けるようになりたいと思つています。

31

私は幼いころから父の機嫌をバロメーターにして心を小さくしたりしてきました。父が怒るととても恐怖でした。他力の中で育った私は父の顔色だけを見て過ごしていたように思います。それは今も相手が変わっても心は夫や子供の顔色に敏感に自分の心を動かしてしまいます。私も

夫が爆発。子供が爆発。そんな時私は悲しくなつて肉の私がいなくなればいいのだと思つてしまします。私の中は死にたいと思う思いをいっぱい詰まつてきたなあとやつと今世知ったのです。何度も何度も死を選んだ過去を感じます。先生が言い残しておられた「人を殺してはいけない。自分を殺してはいけない」が心に響きます。

恐怖です。自分が嫌われることの恐怖が私の思

いを相手に告げることを躊躇します。こうして思いを書き出せばいいのですが、さて相手に言葉で伝えようとすることができない素直には出せないそんな私があります。嫌われたくない。私にはどうしてか嫌われたくない人と嫌われたい人があつて嫌われたくない人は恐怖。嫌われたい人にはトコトン

いくみです。
れてくださるメツセージその思いを受けてやつて

私の岩盤は、身の危険を感じる恐怖。降りかかる怒りを受ける恐怖。私はいつも怒りにおどおどしながら生きてきたからこれが私にとつての今の岩盤です。

いつたいどんな人なのかというと恐怖で用心してしか話せない人です。嫌われたい人は自分の中に入れたくない人です。死んでしまえとくらいに思いう人です。こんな心を持つて生き続けてきた永い転生でした。すべてすべて金に繋がつて出てきた思いと権力に恐怖してきた思いです。田池先生に出会えた私は幸せでした。こうして生きていこうと思つて先生の教えてくださつた数々を一つ一つやつてきたけれど、それも先生に他力してきたのでした。今はもう自分を信じてやつていくだけでそれがやつとできる環境です。香世さんの毎日入

「受けでいけばいいのです。あなたが作つた岩盤です。優しい思いを向けていきましょう。岩盤は消えてなくなりますよ」って思いが上がってきました。やつていこうとまた新たに思つています。嬉しいです。ありがとう。

初めは肉を本物とする思いに向けた。その中で

も我に従えと牛耳つていく思いが特に強い。そし

て、その強い思いの底にある「我こそ素晴らしい神アマテラスなるぞ」の思いに向けた。これが私の岩盤か。

ワン、ツー、スリーでアマテラスに向けた時、底の方でカチンとしてびくともしないものを感じる時がある。ああこれが私の中の愛を遮^{さえき}っているんだなあと思う。そしてその岩盤「我こそ素晴らしい神アマテラスなるぞ」と豪語している、その思いを思う。温もりを捨てアマテラスをとつた心。アマテラスを神として崇め奉^{あが}つてきました、全身全靈を捧げてきた。それなのに私は、その神にずっとずつと裏切り続けられてきた。

その恨みつらみの中で死んでいった思い達が怨念となり幾重にも折り重なつてべつとりと厚く厚く重ね合わされそれが岩盤と化した。

ああ本当に母さんの温もりしかないと思つた。お母さんの温もりの中にどんどん解^{はな}き放していく。どこまでやれるか分からぬけどそれをやっていく。喜んで楽しんでやっていく。それができる今、幸せだと思う。

33

どんなに自分が間違つていると分かつていても、崩していきたいと思つていても、中々そうはいかないのが岩盤です。

崩れてきたかなあと、思つていると「本当にできていますか」と、問われる現象が、展開される。そこで又、自分の愛は偽物^{にせもの}であつたことに気づかされる。

自分が自分に、愛に帰つて欲しいから、再び厳しいシナリオを用意してくる。

愛を捨て、アマテラスを求め、その世界の中で生きてきた私。

意識の転回、一つ、愛……私の大きな岩盤です。

守るべきものなんて何もないのに、握^{にぎ}つていては苦しいだけなのに。

心は叫んでいます。「もう崩して崩して帰つていきたい」と。

「その手を離して、帰つてきなさい」と言われています。

どんなに岩盤を崩そうと、肉に立つていては不可能です。自分は意識であると思つた途端^{とたん}、あつけなく溶けていく。

岩盤は、意識の転回が進んでいるかの、バロメータ。

一つ一つ、私の壁を崩して、愛に帰つていま

す。

34

私の岩盤はアマテラス。嫌いではありません。私の譲^{ゆず}れないもの。プライド。

死んでも負けない。くすんだ誇り。私の堅い、重い心。ギリギリに締め上げ自分を殺してきた冷たいエネルギー。どんよりと私を覆つてる他力のエネルギー。

チャツピーちゃん（極ミニセラピー犬）を想うと色んなものが消えていきます。

チャツピーちゃんを見ると、私が消えて麗^{うるわ}しい事、ワクワクする想い、限りない優しい喜びが浮かんできます。

「本当の自分を忘れた人が人類。それを私はそうじやないと言つてている。」

田池先生、最初から私達を信じておられる。私は愛、あなたも愛、一つ。母も私を信じていてく

れた。もう一人「○○さんなら必ずやこの結婚を成功させるでしょう。」と父に手紙を書いてくれた方。信じていよいのは自分。自分への信。コロナのおかげで時間もでき今迄の忙しさは何だったのか疑問に思っています。向け先自分との約束を思います。

現象で背中合わせに田池先生が……。その時アルバートとアマテラスは背中合わせ。アマテラスの背中合わせにはアルバートが……暖かかった。チャッピーちゃんを想うと、色々なものが消えていきます。チャッピーちゃんを見ると私が消えて、麗しい事ワクワクすること、限りない優しい喜びが浮かびます。波動と思います。

35

肉にしがみついてる私です。怖い怖いと云つて、不安や恐怖感で自分をごまかしてきました。自分をごまかして、自分の心、苦しんでる心を見ようとせず、助けて救つてと外へ救いを求め続けてきた転生。

岩盤。完璧にしたいんです。私は、自分そしてまわりをそつなく完璧に形を整えたいたい思いが一杯あります。自分はすばらしくあらねばとの思い。いい子ぶりっこ、人から良く思われたい、正しくあらねばならないと。そして人に対しても使っています。肉、形を整えようとする思い、岩盤。そしてその思いの後ろには、いつも不安恐怖があります。まだまだ肉、形が整っていることに安心を感じる自分がいます。

それじゃあ何の為に生まれてきた自分なんだろ

うか。と思つた時、それでも待つてくれているんですね。不安や恐怖の思いが必死で私に間違つてゐるよと伝えに出てきてくれるんですね。

だから今世こそ、苦しみから逃げずに、完璧を求める愚かな自分と共に、タイケトメキチ母の温もりの中へ帰つていきます。



36

「あなたの岩盤に心向けてください」と初めて香世さんに言われた時、何も考えずにただ「岩盤」とだけ思つて瞑想をしました。突然出てきたのは「お母さん」でした。肉の私には思いがけない岩盤でした。そしてそのまま今度はお母さんに心を向けて瞑想を続けました。ただ苦しくて苦しくてクソクソクソの連続で、反転も出来ずにその時は終わりました。

その後、今度はセミナー会場で、「岩盤、お母さん」に心向けて瞑想をしました。「清く正しく美しく」が出てきた途端とたん、何かに振り回される私がいました。抑え切れない怒り、戦つても戦つても押し寄せてくる凄まじいエネルギーで肉体がどうにかなりそうな感覚でした。香世さんの「田池

留吉に向けてください」の言葉でようやく静かになりました。

「間違っていました。本当に間違っていました。お母さん、ごめんなさい」つて何度も何度も叫んでいました。

私の岩盤は、私が作り上げた「私のアマテラス」です。沢山の闇のエネルギーを押し込んでがんじがらめに自分を縛つてきました。「心、解放してな。」田池先生の言葉が思い出されます。僅かに残された今世の肉の時間を大切に、「思うは田池留吉、アルバート」一筋で学んでいきたいと思います。

それはこの世的に云えれば良いほうに捉えがちだけれど、今はそんな自分が少しずつ緩んできていることに嬉しく思っています。今までくそまじめに生きているつもりはないけれど、よくよく自分を振り返つてみれば、時折、自分の思いを殺してしまでも、丸く收めようと心を碎いていたように思います。それがいいことだと信じてきたり、また幸せにも繋がっていました。それは兎にも角にも自分のためだったのです。

今、心を見る学びに出会い本当にすごいことだと思っています。

肉の自分を本當とするか、意識こそが本当の自分だと捉えているか、そこが大切なことだと思います。自分は良いことだと思っていても、実は自分にとつて苦しみになつてているかもしれません。所謂くそ真面目はそのことになかなか気づけないのかもしれません。私の場合は自分が苦しんでいます。

私は自分のことを「くそまじめ」と思っている

ることがなかなか分かりませんでした。今、くそ真面目に生きてきて、自分自身に苦しかったんだなあ、頑張らなくてもよかつたんだなあと受け止めています。苦しい心は自分が一番よく知っています。そんな自分に心からごめんなさい、ありがとうございます。どうと伝えたいです。

向けた途端に「私の子供を殺したら絶対に許さないからな」とグオーッと出ました。ものすごい反抗心、抵抗勢力です。それほど握っているとは思つてもいなかつたです。

38

私の岩盤は何かなど思っていました。

少し前に、体の一部分が痛くて体をかばう思いがあつたので、やはり自分の肉を離せないと思つていました。

しかし、今日思いました。私は子供をすごく握つていると。

私のこの肉に代えても子供を守つていくと出できます。こんなに縛り付けていたことを知れて、とても嬉しいと思いました。ずっと、この心で生き続けてきたことを知ることができて、よかったです。そう思つて心を見ると、本当にしつこく子供を思つてゐる私がいます。

子供もたまらなかつたやろうなど思いました。自分の心の模様で子供を殺したり、死なないでと願つたりする心。それにまつわる様々なる心。この心を見て、少しでも離していきなさいといざなわれています。

握りしめてきた心、しつかりとしつかりと見ていきたいです。

すごいエネルギーでした。そして、田池留吉に

やつと今世、離していく術を伝えられた。

少しでも離していけたら、今世生まれてきてこの学びに会えたことがどれほどのものであるか納得できました。

長い長い旅路、帰ろうと、ともにともに帰ろうと自分に呼びかけ続けていきます。

しかし、今は私の岩盤は子供ですが、また次の岩盤が出てくるかも知れません。だから、いつも心を見て、自分に問い合わせていくことが自分に対する一番の愛だと思いました。

語れる機会をありがとうございました。

やはりその後、香世さんのビデオで岩盤に向けて瞑想しましたら、もっと深いと言うか何かそれ以上入つて行けないようなゴツンとしたものが感じられまして、これ以上入つてくるなと言う感じでした。

少し感じたことは、絶対に壊されないぞという

ガンとした思いと、ほんの少しだけ揺らぐような感じです。

終わりなく岩盤を見続けるのだと思いました。これが宝の山となるように見続けてまいります。

「岩盤」と言われてもね／……。

つかんで離さないもの、絶対に崩したくないもの、と言われてもね／……。

子供の健康の心配。幸せでなければいけない、立派でなければいけない、何にも動じずマイペースを貫かなければいけない等など。

全部、肉の世界のこと、肉しか信じられない思いいから来ること。

意識など信じられない、肉しか信じられない。

「岩盤」つていつたい何なんだ!?

問い合わせれば問い合わせるほど、得体が知れない、
分からぬ。

田池先生が言つてたなあ。

出し汁がしみ込んだおでんの大根みたいかな？

自分で自分の岩盤が全く分からぬ。

頭を回して考えあぐねても、一向に分からぬ。

あ～～、まいつか……。もういつか……。

只々、岩盤と思ってみようか。がんばん……。

あれ～～おかしいな～～。

得体のしれない岩盤が、形は見えないけど、なんだか可愛く思えてきた。

思うだけでいいんか!!

思えるだけで嬉しいんか!!

「岩盤」ねー。さっぱり分からぬけど、少し嬉しくなってきたぞ!!

もう少し思つてみようかな。

ふと疑問が出てきた。

「いつたといつから岩盤を作つてきたんだろ？」

太古の昔のそのまた昔からですよと返つてきた。
そんなに長くずっとずつと一緒だつたんだ！

ありがとうございます岩盤。私とひとつだつたね。

これからもずっと一緒にね。

もつともつと思つていくよ。

よろしくね、ありがとうございます!!



全部死ね～！

蹴散らし、亡き者もしてやる。

私は、この肉です。

全てを叩き潰して、自分さえ叩き潰しても、

私はこの肉を守る。

「この肉を守りたい」

「私は素晴らしい」

「私は、私は、私は……」

どこまでも続く、この思い。

苦しい。

この自分が苦しい。

これこそが私の岩盤です。

肉、肉、肉なんです。

守らんが為には、全てを破壊してもいい。
全てを破壊して残るモノは何か？

「私はこの肉です」

肉の自分でしようか？

それも叩き潰す、私の思い。

そう叫ぶ自分が大きく、固く固くまさに岩盤
としてあるのです。

この岩盤を、もし薄く出来たら、無くしてい

けたら、私はどうなるのか？

想像もつきません。

私の行く手を阻む者は何人といえども許さない。
はば
死ね～！

つまり、この岩盤の上に朗々と存在しているのです。

岩盤ごと、変わっていきます。
それが幸せなんですね。

崩せない岩盤。

何も無くなるのが不安で、岩盤で守らなくては……とする自分がいました。

田池留吉に向ける。

それしか無い。

田池留吉の目を思う。

岩盤の上に立つ私が崩れていく。
たも保てない素晴らしい肉の自分。

本当は、何も無かつたんです。

作らなくともいい岩盤を必死に作り、守り、

我こそがと嘯く自分が見えます。

田池留吉、ありがとうございます。

田池留吉、ありがとうございます。

たくさんの中の抵抗勢力と厚くて硬い岩盤を敵とせず、ともに変わつて参ります。

何も要らなかつたんですね。

本当の自分に、出会つていくだけ！

必死に肉を守り、己を振りかざす自分と、どもに変わっていきます。

こんな課題を頂けて、岩盤の厚さを再確認できました。

ありがとうございました。

ずっと肉を握り締めてきました。「私は肉」この思いが私の岩盤です。苦しいのに止められない。でも心を内に向けると安らぐ。何度も私の岩盤に思いを向けました。拳が緩み、お母さんの元へ帰りたい思いが強くなり、やがて帰ろう帰ろうと前を見定め行進します。あの宇宙にどうしても帰りたい、帰ります。瞑想で蟻ほどもない肉を感じ、大きく捉えてきた肉が小さな存在だつたと思いました。そのことを振り返っているとこう言わされました。

「いいえ、本当はないのです。あると信じたから真っ黒を垂れ流してきました。ないのです。思ひだけが存在するのです。わかりますか？あなたは今誰と対話していますか？あなたの中の私ですか。そうして心をずっと内に向けて私を思つて

ください。心を外に向け私を捨てた途端、虚しさにあります。私にすべてを委ねてください。それが、あなたがあなたで在ることです。」



「絶対騙されたくない、裏切られたくない」と悔しさの中でのたうち回る。肉が崩れ落ちるのは耐え難い。姿、形の醜さを受け入れられない。こんなまやかしに騙されたくない。それなのに田池留吉、母に思いを向けると一瞬で嬉しい、温かい、こんな私にでも温もりが伝わってくる事に驚く。それでもその後すぐに「そんなはずはない、何が温もりだ、どれだけ艱難辛苦を味わってきたか、

なぜ今まで田池留吉は助けに来なかつたか。
こんな肉を持たす必要があつたのか」と肉は覆い
かぶさつてくる。「許せない、許せない、こんな
地獄を這い^はいざり廻させて今更、温もりに思いを向
けろと言う田池留吉を許せない」それでも、ゼ
ロ歳に思いを向けたら、花を見たら、動物、自
然を見たら、肉を持たせてもらつた
事がただただ嬉しいと湧き^わ上がつて
くる。伝わつてくる意識の私はただ
ただ嬉しいだけ、それなのに肉にな
なつた瞬間からクソクソ、殺してや
るの連續。そんな肉の自分にほとほ
と辟易^{へきえき}しながらも、薄皮を剥ぐよう
に底に固まつてゐる岩盤（肉）を転
回していきたいと心底思えるようにな
つた。二五〇年後はまだまだ遠い
が、繋げようとする自分を信じて今
を生きる。



43

私の岩盤は、どうしても肉が自分だとする思い、
それを整えようとする思い。これが岩盤だと思う。
どんなに田池留吉、お母さんを思い嬉しいと思つ
ても、この岩盤につき当たつてしま
う。その感覚が岩盤に向けての瞑想
ではつきりとしてきた。これまでの
過去世はもちろんだが今世だけでも、
岩盤の強化に力を^{そそ}注いできた。その
岩盤の基礎になるのは、「私は肉だ」
とする思い。そこから幸せになる為
には、いつも相対評価の中で他人よ
りも勝る事^{まさ}だった。自分には何も勝
るものがないと知ると、子供達を利
用した。それも思うようにならない
と、今度は神頼みをしてきた。目的

は「幸せになりたい」。

幸せが全く分からなかつた。全て全て間違つていた。中が叫んでいる。間違つていた、間違つていた。お母さんごめんなさい。

今回のコロナウイルスにより、偽物の世界の夢さ、砂上の楼閣にしがみついている自分の姿が見えてきた。いつもいつも伝えてもらつていて。「帰つておいで、帰つておいで」そんな優しさが響いてきます。意識の転回の重要性を肝に銘じて瞑想を続けます。

ありがとうございました。

とても苦しい思いで
した。

すごいですね。自分
の苦しい思いを、全て
崩して行く方向に計画
してきた。

この頃感じている事は、深い深い瞑想が出来る

時がある事です。

苦しくありません。深く深く、今迄よりもつ

と底を目指して潜もぐつて行く感覚です。気持ちが良いです。

瞑想の後は充実感に満たされます。頭もスッキリします。体調も良いです。

背骨の歪みも自分で治せると、思つてきました。心と体はいつもセットなんだと思つています。岩盤がある。自分の思いの中に、強固な岩盤がある。その強固な岩盤を見つめ、溶かしていけば、もつと底の底へ行ける。その岩盤は自分が握にぎつてている思ひでした。

肉には、素晴らしい事など何にも無かつた。



本当にその通りです。

コロナウイルスも、目に見える形で崩していきなさいと言っている。そして、本当の愛が存在する事を証明してくれています。

45

そびえ立ちたい思いが私の中から飛び出きます。立派でもない、すばらしくもないのに、アツという間にそびえ立つ私が出てくるんです。^{誇ほこ}れないような私はダメ、私は正しい、私は頑張つてている、私は辛抱強いと、すぐにそびえ立てるようを持つていく私。誇れる私でなかつたから何の値打ちもないと、そびえ立てるように、肉の努力、肉でカモフラージュしてきた。なんと薄つぺらでお粗末な、^{そまつ}周りからもバレバレなのに、恥ずかしい、ちっぽけな私を「苦しかったね」

と抱きしめていきます。私の中にあるやさしい温もりを伝えていきます。何か、ホツとしています。やつとやつとです。

タイケトメキチありがとうございます。

本当の私ありがとうございます。

まだまだ長い道のりです。

きっときっと帰っていきます。

みんなみんなありがとうございます。

46

あなたの中の譲れないもの、譲れないこと、守り通したいもの、ここだけは絶対に崩したくないもの……と、思いを自分の中に向けていく。

あれもこれもと思い浮かぶけれど、それが本当に離せないもの、握つているものかと、また思い

62

を自分の中に向けていく。あれこれ思い浮かぶけれど、でも「絶対!!」と言うのなら、それが絶対ではなく変動していく、いつているものだと思う。仕切り直し。それ以外のものに切り替えて……と消去法でいくと、突き当たったものが「私は肉だ」という思いだつた。これが絶対離せない、守り通したい、譲れない私の中の岩盤……。

今さら何を言う、同じではないか、同じように生きていけ。気の遠くなるほどいっしょにいるんだ、今さら何を言う。肉だ、肉だ、肉、肉がお前だ、お前が肉なんだ、どこが悪い、ずつとずつとずつといっしょにいたではないか、今さら我らを裏切るのか、田池がなんだ、一度でもお前を救つてくれたことがあつたのか、よく思い出してみろ、苦しんでいるお前を救つてくれるどころか「あなたが間違っています」と突き付けてきたではないか。助けたのは我らだぞ、今さら何を言つてゐんだ、

目を覚ませ、お前は肉以外の何物でもない。肉が大事、肉さえあればと頑張つてきたお前はどこへ行つてしまつたのだ……書けば書くほど、「真つ直^すぐに歩いてきなさい」といういざないを感じてくる。書いていることではなく心が動いているのだろう、心が温かく喜びでいっぱい涙が出てくる。何だかお母さんの……あとはもう書けません。

肉を本物だとしてきた歴史が私がこの地上に降り立つたときから始まつてゐる。それをすぐに回収できるほど意識の世界は甘くない。だけど、だけど、可能だから肉を持つ必要のない意識の世界

から、田池留吉

という肉を持つ

てこの三次元に

降り立つたとい

う事実がある。

コノハズク



猶^{ゆう}予^よは二五〇年

三〇〇年。だからこそ肉を本物とする意識達が帰

りたいと、肉を離す恐怖、行先不安を強く私に訴

えてくる。その思いを肉を通して感じていける今

という時間、本当にありがたいです。目を開けれ

ば世間は今、コロナウイルスで狂乱きょうらんの舞を舞つて

います。その中でさえ、目を閉じる時間があります。

目を閉じて何を思うか、その向け先を田池留吉に向けていくと、雑多な思いは消えて、自分と自分がいるだけです。その思いを信じて、信じて、やり続けるだけでいい。

岩盤、それが私に教えてくれるのは、あなたが

気付いていくだけですよという愛でした。ありがとうございました。

47

肉が私です。

少しは、分かつてているはずと思つていたけれど、まったく何も分かつていなかつた。

他力一色でした。他力そのものの中で学んできたという現実に正面衝突しています。

まつたく田池留吉とは合わない中で学んできたのです。

全て他力でした。

48

私の岩盤は「私は肉です」です。

苦しくても仕方がない肉をどうしても離せないのだから、すべての転生てんじょう、肉の幸せだけを手に入

64

れんがための時間と努力と苦しみだつた。

それを今更あなたは肉ではありません。意識、
波動、エネルギーと毎日言われても、「どうにも
ならんのじゃ!」「肉が離せんのじゃ!」

それでも「帰りたいあの温もりに、広がりに、
一つに溶け合う世界に、お母さん、お母さん!!
……」

わたしの心の中は、この二つの叫びでいっぱい
です。

肉を握^{にぎ}つても何も良い事はなかつた……

寂しくて怖くて行先が見えず不安で、散々虚^{むな}
さを味わつて疲れ切つています。

これが私の肉の現実で暗黒の宇宙です。

その宇宙が今か今かと出してくれるのを喜んで
待つっています。

安心して思い切り叫べるこんな幸せはないと

待つっています。

「クソ！クソ！田池！」と叫びながら待つてい

ます。

真っ黒だから凄まじい塊^{すさまじ}だから生んでもらえました。

待つてくれている母なる宇宙、いつになるか分
からないけれど自分を見限ら必ず帰ります。

ずっととずっと長い間叫び続けていた。助けてく
れ。助けてくれ。寂しかつた寂しかつた、誰でも
いいこの心を癒^{いや}してくれるものなら誰でもいいと
叫んでいました。でもそんなことを口に出すのは
できない。弱みなど出せなかつた。中はもう苦し
くて苦しくて寂しくてたまらなかつた。絶対弱音
など吐くものか。いつも奥へ奥へ飲み込んで表面
をいつも繕^{つくろ}つてきました。素直にどんなに叫びた
かたか。本当に内と外いつも使い分けをしてい

うに思います。「宿禰」という「名」は大和朝廷初期の役職名というか、天皇の配下の位を表す言葉です。当時、制定された「八色の姓」のうち、
眞人、朝臣に次ぐ3番目の位が「宿禰」になるわけで、しかも「宿禰」
は武人とか行政官を表す称号でもあって、これから見ても、「野見宿禰」
は、大和朝廷側の重要なポストにある人物と考えてよいでしょう。

これに対し、「当麻蹴速」は、被征服豪族である「葛城氏」の一族で、力自慢で蹴り技が得意な無頼漢、そんな風に位置づけられています。

つまり、この勝負、最初から「野見宿禰」が勝つことが決められているように思うのです。

時は垂仁天皇7年の7月7日のこと、天皇は、かねがね「俺より強い者はいない」と力自慢を鼻にかける「当麻蹴速」が煩わしくなりません。「誰か、こいつの鼻を叩き折る者はいないのか」ということで、出雲国の「野見宿禰」が「即日」呼ばれ、垂仁天皇の前で相撲を取ることになります。この頃は、相撲はスポーツというより「戦闘」つまりは殺し合いです。土がついたら負けということではなく、どちらかが死ぬか、動けなくなるまで戦うというものです。

こうして筋書き通り、「当麻蹴速」はあばら骨を踏み折られ殺されてしまいました。勝者である「野見宿禰」は、葛城にある「蹴速」の土地を天皇から与えられることになり、それが今も香芝市に「腰折田」として語り伝えられています。

「天覧相撲」ってご存じでしょうか？「天覧」とは、天皇がご覧になっているという意味。つまり天皇立ち会いの相撲勝負、これを天覧相撲というわけです。



大和と葛城の境界 曽我川

「東～○○山、西～△△海」っていう相撲の呼び出しにもあるように、相撲は東西戦になります。今では「東西」というと「関東」と「関西」と考えられがちですが、これは近世のお話で、昔は、「東京」とか「江戸」とか、なかったわけです。

では「東西」とは、どことどこ？ となるわけですが……。

当時の奈良は、曽我川を挟んで東西に真っ二つに分かれておりました。東が「磐余」を中心とした大和朝廷発祥の地、西が大和朝廷にまつろわぬ人々の住む「葛城」という地です。「まつろわぬ」とは「従わない」とか「反抗している」というぐらいの意味で、こういった人々は大和朝廷側からは「土ぐも」と総称されていました。こういった当時の情勢を把握しておいた上で、日本初と言わたった「天覧相撲」について考えてみましょう。

まず対戦したのは、「たいまのけはや当麻蹴速」(葛城市当麻) と「のみのすくね野見宿禰」(桜井市出雲) の二人ですが、この名前については象徴的に使われているよ

踏み殺することで、大和朝廷の力を見せつける——天覧相撲とは、天皇臨席の公開処刑だったのではないかでしょうか。とらえた蹴速に、対戦の日まで、食事を与えず飢えさせたり痛めつけたりして勝負を有利にする、それぐらいのことはやったのではないかでしょうか。

さて、この二人の決戦の場と思われる桜井市の「相撲神社」、そこは我が町、広陵町から自転車で1時間半、山辺の道から少し外れたところにあります。ここを訪れて、まず気になるのが、その案内板の表示。「国技発祥の地」ではじまる案内文の終わり近くに「カタヤケシ」という意味不明の言葉が。では、この「カタヤケシ」とは一体、何のことでしょうか？ 結論から言うと、「カタヤ」というのは、相撲の土俵のことを言い、「ケシ」は「消し」と考えてもいいのでは……。つまり「土俵でやっつけてしまえ」「土俵で殺しちゃえ」みたいなニュアンスということになります。

となると、日本初の「天覧相撲」とは、やはり天皇臨席の「公開処刑」！ 大和朝廷の、まつろわぬ民に対する妄執のごとき征服欲、そんな象徴的な事件だったような気がいたします。





香芝市に残る腰折田の遺跡

同じ頃、岡山の吉備氏と奈良の葛城氏の関係を巡って、雄略天皇が横やりを入れたことが「日本書紀」に紹介されています。吉備氏のリーダーである吉備田狭が、「自分の妻ほど

美人はない」と自慢しているのを、雄略天皇が知り、彼を朝鮮半島の任那に派遣してしまい、その留守中に、彼の妻である稚媛を自分の妃にしてしまったのです。その稚媛というのが葛城氏の娘でした。

要するに、雄略は稚媛を奪うことで、葛城＝吉備連合に楔くさびを打ち込んだことになり、同時に葛城の血の中に、天皇一族の血を残そうとしたことになります。つまり、「大和」は「葛城」を抑え込むため、なりふり構わず策を弄しているように思えるのです。

こう考えると、この天覧相撲も、大和朝廷が、葛城氏の不穏な動きを封じ込めるための「見せしめ」だったような気がしてきます。つまり当麻蹴速たいまのけはやは、葛城氏の中で、大和朝廷に抵抗する過激派のリーダーだったのでは……。想像をたくましくすれば、捕らえた蹴速を天覧相撲という公開の場所でやっつけてしまう。当時の相撲は、先ほども述べたように、スポーツではなく、戦闘そのものであり、相手が死ぬか動けなくなるまで続けられました。葛城氏の不穏分子を

ました。自分に素直にどんなになりたかったか。

でもこの抑え込むエネルギーはすごいエネルギーです。瞬時にやつてます。自分と自分しかない。誰にも救つてはもらえない。

いま、コロナウイルスでセミナーもない。田池先生が3Kと言つてくださつてた。神、金、健康、今まさしくこれです。UTAブックさんが言つてくださつている心を向けるということ、書くといふこと、読むということ、その作業を通して、自分の中に「田池留吉（意識の世界）」への信を確立する。これでした。

ありがとうございます。

しているように思う。

「〇〇〇〇」という名前を持つたこの私」がしつかりと中にあつて、「崩すものか！」とふんばつてる感じです。

今世愛したもの、出会つた人たち、苦労して手に入れたもの、乗り越えてきた試練、その全てが、今の私を形作つて いる。 そう、形。形を崩したくないんですね。

そう思つたら、「岩盤」と大げさに言うほどのものではなかつたかな、とも感じます。

51

肉と意識の接点。

私にとつての岩盤＝今世の肉の私の思い。今の肉を持っている私が、意識の転回を邪魔

50

二〇〇五年水明館で意識の流れ出版記念セミナーが開催された。コロナウイルスで騒々しい世の中でも、何となくゆつたりと静かに思えること

がうれしいかぎりだ。

その時のCDを見ていると、沢山の友が全員がニコニコと輝いていた喜んでいた、その中に田池先生がいた。

何でも喜んでいればプラスのエネルギーが、逆の場合はマイナスのエネルギーが流れる。この人嫌いと思えばマイナスのエネルギーが、いい人と思えばプラスのエネルギーが出る。同じ音叉おんさを二個離して、片方叩くと一方も共鳴する。

意識の転回に向けて瞑想すると、肉から意識への自己確立と出てくる。改めて肉と意識の接点は何だろうかと思う。肉も肉体細胞から愛の波動が流れ、意識の世界は更に純粹な波動が流れている。意識は永遠無限、波動、エネルギー。ラジオに徹して、愛の周波数に合わせていこう。

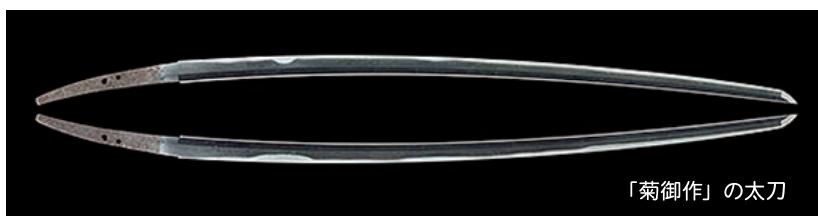


後鳥羽天皇はといふと、三種の神器が無いまま後白河法皇の院宣（いんせん）を根拠に即位していたのですが、平家側の安徳天皇が壇ノ浦で亡くなるにおよんで、早速、源氏の手で、三種の神器探しはじまります。結果、海底から、三種の神器のうち、「八咫鏡」（やたのかがみ）と「八尺瓊勾玉」（やさかにのみがたま）は回収されましたが、神劍である「天叢雲剣」（あめのむらくものつるぎ）だけは、どうしても見つけることができませんでした。

となると、後鳥羽天皇は、史上初めて、天皇のシンボルである神劍がないまま即位された天皇ということになります。

これがコンプレックスになったのでしょうか、十九歳で土御門天皇（つちみかどてんのう）に譲位され、後鳥羽上皇となられるや、紀新大夫行平（きしんだゆうゆきひら）という刀工を召し出し、行平から鍛冶（かじ）の術を習われたというのです。

そればかりか、この水無瀬離宮（みなせりきゆう）に番鍛冶（ばんかじ）と称して、刀鍛冶の工房（ぶぎょう）を構え、二ヶ月交替で、四人の奉行（奉行）、二人の刀匠（ばんかじ）に奉仕させ刀を打たせるようになりました。この番鍛冶に選ばれるのは大変な名誉でしたが、上皇自らも刀を打たれ、上皇が打った太刀（たち）には菊花紋（みずか）をつけ、これら太刀は「菊御作（きくぎよさく）」の太刀と呼ばれるようになったと伝えられています。



「菊御作」の太刀



後鳥羽上皇水無瀬宮跡の碑

今からおおよそ八百年ばかり昔のことになりますが、大阪は三島郡の水無瀬というところに後鳥羽上皇の離宮がありました。今では、東海道本線の西側、「島本駅」と「山崎駅」の間に小さな「後鳥羽上皇水無瀬宮跡」の碑があるだけですが、この離宮で後鳥羽上皇勅撰の「新古今

和歌集」^{へんさん}が編纂されていたのです。

刀とどんな関係があるのかって？

そうですね、「和歌と刀」、一見関係なさそうですね。おまけに小見出しに「かき氷と刀」と掲げてしましましたので、これではまるで謎かけ話です。

さっさと種明かしにかかりますので、しばらくお付き合いください。後鳥羽上皇が天皇として即位されたのはまだ四歳の頃です。しかも同時期に平家のかつぐ安徳天皇も六歳になっておられたわけで、源平合戦のさなか、二人の幼年天皇が両立していたことになります。そして、この二年後、安徳天皇は、三種の神器を抱えたまま壇ノ浦に身を投げられ、平家は滅びるに至りました。

太刀は神事の道具から戦闘の道具へと進化し、馬上戦闘に適したよう直刀から今のようなそりのある刀へと変化していきました。

想像してみてください。上皇が、たすき掛けで、自ら打った刀を両手で持ち、氷室から取り寄せた氷にあてがい、かんなのように削っている様子を……。

これではまるで「刀」というより、「包丁」を便利使いしている感覚です。これが後世になると、「^{たましい}武士の魂」だとか、「刃を手で触れる等もってのほか」となるのでしょうか。「神



剣」なくして即位した後鳥羽上皇の「こだわり」がさせたパフォーマンスだと思うのですが、いかがでしょうか。

つまり、水無瀬離宮とは、和歌所として歌人たちのコミュニティの場でもあり、刀鍛冶の工房でもあったわけです。まさに文武両道に優れた後鳥羽上皇ならではの離宮運営であったと言えるでしょう。

しかし、別の見方をすれば、幼くして天皇の座に据えられ、それも「三種の神器なくして即位した天皇」と、なにかにつけ揶揄されてきた天皇ですから、刀剣にしろ和歌にしろ、ともかく我が身の後ろ盾になる権威が必要だったように思います。それでいて、反面、その権威を嘲笑うようなところがあつた方のようです。

こんなエピソードがあります。夏のさかり、この離宮に藤原定家や鴨長明ら十四名の寄人、つまりは「新古今和歌集」編纂のためのスタッフになる訳ですが、彼らが汗をかきかき編纂や校閲作業にあたっているとき、これをねぎらうため、上皇自ら氷室の氷を取り寄せ、これを削って甘葛の蜜をかけ「かき氷」としてふるまつたというのです。しかも、その氷を削ったというのが、上皇自ら打った「菊御作」の太刀であったと言います。



後鳥羽院像（伝藤原信実筆、水無瀬神宮蔵）

私の岩盤は「自分を肉と信じてきた思い」です。長い間私は肉を自分と信じて生き続けてきました。その結果私の中には肉を自分と信じる思ひがとても強く強く現存し、その思いの中に雁字搦めの状態です。そして今世初めて「私たちは肉ではありません、意識です」の真実に出会うチャンスを頂きました。でもそれはそんなに簡単に私の心にストレートに入つてくることはなく、本当に心に響いてくるようになるまでに三十年以上の年月が掛かりました。そして今やつと、ああ私たちには意識なんだ、ほんの微かですがこのことに心で気付き始めています。微かな響きではありますが、このことに心で気付き始めたことは、私にとつては本当に奇跡だと思えるほどの感触を今私は感じています。それ程私は「この肉の世界が現実だ」の中に存在していたからです。これが私の岩盤だ

と思ってます。この岩盤、肉から意識へと転回していくことがこれから私がやっていくべきことだと、そしてその為に日々の生活があり、環境があり、たくさんの現象があるので理解出来るようになりました。意識の転回は、生易しいものではありませんが、今これほど幸せな人生はないと言えます。心が躍り、心は喜び、本当に幸せな日々を過ごしていきます。ありがとうございました。

誰の為でもない自分の為に。自分一人の為に。いいや、たくさんの自分自身の為に……それでも真っ黒に凝り固まり狂い続けることしかできなかつた自分の為に、うちは今世ひとつ肉を用意し生まれてきた。そのところがうちにには、はつきりと分かつてなかつた。飽くまでもうち

は肉。肉の○○○○が頑として、分厚い壁となつて立ちはだかっていた。いわゆる岩盤と呼ばれるものか……この肉の○○○○が聳え立ち、立ちはだかり、崩してなるかと頑張つて踏ん張つて生きてきた。田池留吉何者ぞと……血氣盛んに喚きとうし、怒り狂い、真つ赤になりながら立ちはだかり続けてきたんや。負けるかとな……崩せるかとな……勝つてやるとな……我に従えとな……我にひれ伏せとな……我を崇め奉れとな……跪けとな……やつてやつてやりまくれとな……仁王立ちになり、通せんぼして立ちはだかつてきた。ここから先は一步たりとも通さんぞと……一歩たりとも立ち入ることは許さんと……仁王立ちになりながら真つ赤な顔をして威嚇し、怒り狂い、嘲り笑いながら真つ向から歯向かっていくと、頑として行く手を阻んできた。くそつたれ、くそつたれと言いながら、叫びながら、喚き続けながら何としても阻止す

ると。何としても通さんと。何としても何としてもとな……喚き続けてきたんです。真つ赤な顔をして、お前殺してやるとな。死ね。死ね。死ねとな……しかし本当は帰りたかった。本当の本当は泣きたかった。ありがとう、うれしいとな。よくぞここまで来てくださつたとな。どんなに詫びていきたかったことか。どんなにどんなにその優しい温かい思いに触れたかったか。飛び込んでいきたかったか。いいや触れたからこそ、優しくて温かいその中に飛び込んでいきたかったかや。我を忘れて飛び込んだかった。抱きしめてもらいたかったか……出会いたかったと。出会いつてくれてありがとうと。待つて待つて待ち続けてきたと……どんなにしてもそれがでけへんうちやつた。どんなにどんなに寂しくて、悲しくて虚しうちでもそれだけはでけへんと、頑として意固地になつて飛び込んでいけないうちやつてん。

何でやろう……

うれしい思いに浸ることが怖かつた。とろけることが怖かつた。自分が無くなると思って怖かつた。自分のすべてが消えていくと思って怖かつた。無くなってしまうと思って怖かつた。とろけて無くなると思うことが怖かつた。自分が無くなることが怖かつた。自分の存在が無くなってしまうことが怖かつた。あー、だからだからいつまでたつても飛び込めなかつた。お母さんの優しさの中に、温もりの中に、喜びの中に飛び込んでいくことが怖かつたんや。なかなかでけへんかつたんや。伝わることがでけへんかつたんや。怖いから、怖かつたから怒り狂うことしかでけへんかつてん。ここから先は入らせへんとな。ここから先は通さんとな。仁王立ちになつて立ちはだかり続けてきたんや。真つ

赤な顔をして、怒り狂つて睨みを利かせてきてたんや。絶対にここから先は行かさんとな……通さんとな……本当は本当はどんなにどんなに帰りたかつたか。どんなにどんなに飛び込んでいきたかつたか。どんなにどんなに抱きしめられたかつたことか……おいでおいで帰つておいでと言う誘いに、呼びかけに、どんなにどんなに素直になつて帰りたかつたか……そんな呼びかけ誘いを横目でチラチラ見ながら、睨みを利かせ続けてきたんです。本当は本当は帰りたかつた。帰りたい帰りたいと叫んでた。けど彼らは、絶対にその思いを出すことはせんかつた。押し込めて押さえ込んで、閉じ込めて冷たい中に押し込めてきた。出てくるなとな。出てくるなよとな。毎日毎日がその葛藤^{かつとう}でうちはいつも疲れ

怒りか恐怖か、握つているものが多過ぎて悲鳴が上がる。これとかあれとか詳細不明。まさに己自身が岩盤、そう心から出てきた。握りしめているものを離していくのは至難の業だが、やっていくしかない。

私の岩盤。ここだけは絶対に離せない物、守りたい物、肉、肉が自分だという思いです。私は肉ではありません、意識です。何度この言葉をこの耳で聞いたことか。日々の瞑想で、ああそうだ、私たちは喜びなんだ、ああ嬉しいな。そう思えることはたしかにあります。でもその思いはすぐに小さく時には消えてしまいます。

肉の安泰、家族の健康、生活の基盤となるお金。この勉強をしていても、そうやすやすと離してはなるものかと離せない。でも矛盾を感じてい

ああまた駄目だ、やっぱり落ち込み不安と恐怖の思いが自分の中をしめていく。このままそれで終わるのかそこから少しでも抜け出せるのか、今の自分にかかっている。あきらめるな。どんな思いも自分の中にあるから出てきてくれているんだ。こんなにも苦しい思いで生きてきたんだ。肉に不都合な事あると途端に出てくる思い、誰に言つても仕方ない。自分の中にあるから出てくる。喜びで受け入れていこう。肉、どこまでいっても肉。今世この思いをとことん見ていく。それが私のするべき事なんだろう。

る。形を崩したくない。守りたいと思っているのに出している思いのエネルギーは破壊のエネルギー。これでは形を守りたいと思つても無理だ。幸せになりたいと思いながらこれでは本当の幸せにはなる筈はずがなかつた。私は矛盾が多い。お母さんのおなかの中では何の束縛そくばくもなく、安らいでいて幸せだつた。さて、死ぬときはどうだろうか。学びにつながらなければ、確実に恐怖で死んでいくだろう。そのエネルギーのちがい、同じ私なのに矛盾している。

間違つてゐるからだ。

何が間違つていたのか自分に問ひます。

Q　お母さんのおなかの中で幸せだつた意識がなぜ肉を持ち温もりと反対の道を行かなければならなかつたのか？

A　私の中のたくさんの真つ黒な宇宙がみんな

「帰ろう、帰ろう、帰りたい帰りたい、帰るんだ、帰るんだ」と切実に叫んでいる。今がチャンスだと、喜んでいるのを感じる。こうして心の中に向けているとさつきまでの自分のエネルギーと変わつていて、柔らかくなつてゐるのを感じる。少しづつ硬い岩盤が緩ゆるんでくるのがうれしい。こういう心の体験が重なり、中の自分の喜びを少しでも感じると、このためにうまれてきたと実感がある。ずっと、ずっと肉の幸せを求めてきた。自分に本当に申し訳ないと思つた。間違つて間違つていたけれど変わろう、喜んで今、肉に流されずに日々やつていこうと思ひます。

いてあげることができませんでした。

“心を外に向け肉の自分を守る” 心に染み付いた心癖でした。

当然、自分の中に心を向ける＝心を見る、ことができませんでした。

私はずっと心を外に向け、自分の心の叫びを聞くことができませんでした。それが私の岩盤でした。

今、岩盤に思いを向けると申し訳ない思いが込み上ります。

頑固でテコでも動かない愚かで己偉い、肉が自分だと思い込んでいる私の心、岩盤がいとおしいんです。

素直になることもこの岩盤は伝えてくれます。その優しい思いが心を埋めていきます。

肉は岩盤を苦しみと捉えました。^{とら}崩さねばと気負う気持ちがありました。

でも思いを向けるだけで良かつた。岩盤は苦しみではなく喜びを伝えてくれます。

岩盤とともに、田池留吉、アルバートに心の針を向けていくこと、思うは田池留吉。

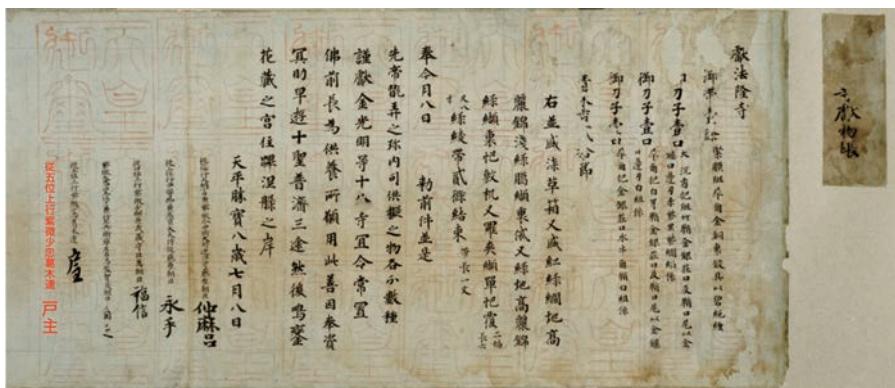
ただそのことを今、学ばせていただける。そのことが嬉しいだけです。

職となるでしょうか。

さて一口に目録づくりと言っても、点数にして約650点、その中には「楽器」「書籍」「文房具」「武器・武具」「飲食具」「薬物」「儀式具」「収納具」「服飾品」と使用目的から見ても多種多様。その材質から見ても「紙」「染織」「ガラス」「金工」「漆工」「皮革」「木工・竹工」「陶器」「編物」「牙甲角」と千差万別。さらに、そのものがどこの国から来たものかまで調べる必要があります。

たとえば五絃琵琶一つをとっても、調査役が、「ひとつ、琵琶。弦は五本、材は紫檀なり、撥はたいまい貼り、螺鈿の飾り、天竺（インド）からの渡来品と思われる」と、品名、材質、特徴を、読みあげると、記録役がこの記載名を「螺鈿紫檀の五絃琵琶」と銘々し、記帳していく、このような寸法ではなかったかと思うのです。

特に纖維などは簡単には見分けが付かず、材質を割り出すのも一苦労、その自利きに足踏みすることも多々あったと想像されます。



国家珍宝帳の最後の部分、葛木連戸主の署名が読み取れます



東大寺正倉院

毎年秋になると、奈良国立博物館では正倉院展が開かれます。

ご存知のように、正倉院御物というものは、聖武天皇のコレクションを、奥さんの光明皇后が、天皇の死後、東大寺に寄贈したもの。その寄贈の際、「国家珍宝帳」なる目録作りが行われました。

正倉院御物というのは、天皇遺愛の品約 650 点、及び 60 種の薬物を東大寺の盧舍那仏（大仏）に奉獻したのが始まりですが、その目録づくりが大仕事。それを仕切ったのが、滅ぼされた葛城（葛木）一族の末裔・葛木戸主といふ人物。国家珍宝帳の末尾には「従五位上 行紫微少忠 葛木連戸主」との署名があります。位は従五位上とありますから貴族の端くれとなるでしょうか。

もともとは従五位下、つまり殿中には上がれない身分でしたが、この国家珍宝帳編纂を見事に完成させた功績により一階級昇進し「従五位上」、つまり殿上人の端くれとなつたわけです。ちなみに紫微少忠といふのは、光明皇后の家政機関で、紫微中台の中間管理

いわば百科事典の編纂をや
るようなのですが、これを
聖武天皇が亡くなられてから、
四十九日の法要までに完成さ
せるというのですから、その
責任者に任せられた葛木戸主



正倉院展の人込み

の苦労はいかばかりか。実作業にして四十日あまり、連日、
献物品に埋もれての格闘が続き、その執念は驚嘆に値します。
まさに「国家珍宝帳」は戸主が精魂を傾けた仕事であり、戸
主は、この完成後しばらくして亡くなったと思われます。

ちなみとつ、この「葛木戸主」に嫁いできたのが、道鏡事件で
有名な「和氣清麻呂」の姉、「和氣広虫」です。

広虫も光明皇后に仕え、夫婦二人して、この「国家珍宝
帳編纂」の仕事ばかりか、光明皇后の慈善事業をも助ける
こととなり、個人的にも戦乱や疫病で親を失った孤児たち
の面倒を見ることになります。これが日本で最初の孤児院
となるのですが、二人は面倒を見た子供たちすべてに「葛木」
の姓を与えているのです。

ここに大和朝廷に滅ぼされた「葛城氏」は、新たに「葛木
氏」として生まれ変わることとなります。

学んでくれてありがとう、田池留吉、アルバート。

はい、私は「岩盤に向けて……」の意識です。

私達は、ただただ田池留吉、アルバートに出会いたくて出会いたくて、田池留吉が肉持つ同時期に母に肉をお願いしました。ただただありがとうございます。ありがとう、ありがとうの喜びだけの意識です。我一族、我仲間、共にひとつ岩盤の意識です。底の底のずっと奥底で凝り固まるしかなかつた日本建国根幹の意識の集合体、暗黒の宇宙がただただ田池留吉めがけ、今世、この時を自ら用意したんです。勿論、肉はバラバラだから、其々の事情を抱えています。しかし、意識の世界は、ただただ一直線に田池留吉、アルバートに向かつて毎分毎秒飛び出しています。全てを吐出し、全てを抱きしめる為だけに肉が必要でした。あーあ、あーあ、私はあなた、あなたは私、ひとつ、喜びだけで此処で待っています。あーあ、お母さん、お母さん、

岩盤に向けて、という時、やはり一番に出てくるのは、この肉を信じる思いです。それが、岩盤です。意識、意識と言いながら、やはり、肉中心に動いているのではないか、根本が、変わっていないのではないか。コロナの御陰で、ゆっくりと時間を持つ事が出来ました。肉の羽を折られた感じです。しかし、心は常にアルバートを呼べるんです。その事を、思います。自分一人で、良かつた。誰に頼る事も、いらなかつた。ただただこの心を、田池留吉、アルバートに合わせる事でした。もう自立の時を迫られています。母なる宇宙が待つていて。アルバートが待つていて、本当の私が待つていて。肉の私も待つていて。今か今かと

待つてゐる、その事実から目を背けるのは止めよう。時間が迫つてゐるから。この肉も、いつまでもある訳ではない。田池留吉、アルバート、母なる宇宙へ帰る旅。有り難う、地球。私達は、帰ります。

私の中の岩盤を思う

岩盤。ずっとずっと守り続けてきたもの。私の中にドシツと鎮座しているもの。無意識に守り続けているもの。

なぜ守り続けているのか？全てはこの肉を守るために。○○○○という肉の私を守るため。守つて守つて守り抜くために、岩盤を作つてきた。そして、守つてきた。

長い長い間、私は自分のことを肉体として認識してきた。肉体の○○○○として、少しでも完璧に、素晴らしい世間に認められるようになりたいと思つてきた。それが、私にとつて肉を追求していく原動力となつていて。そのため、できることは全てやつてきた。本当に貪欲^{どんよく}にやつてきた。そのエネルギーは本当に凄いと思う。これが私の岩盤、パワーの源^{みなもと}と言つてもいいだらう。

岩盤に向ける。私の岩盤はなんだろう？と思うけれど、次から次に出てくる思いがある。全部肉を本物としている思い。自分が今まで原動力としてきた、肉を本物とするエネルギー、パワーがあふれ出される。

そんな思いを抱えながら、今朝、岩盤に思いを向けたら、私の底の底にある硬い硬い岩盤が光り

輝いて見えた。岩盤がめちゃくちゃ優しい。岩盤

は待つてくれていた。そして、崩れていくことを

一緒に喜んでくれている。岩盤に会えたことが

嬉しいと思つた。私の中の岩盤は優しかつた。この岩盤に会える時間を用意したことが本当に嬉しい。

そして、崩れていくことが嬉しかつた。

ありがとう。岩盤よ、ともにいきましょう。



61

岩盤、崩れないもの、肉、形を本物とする思い、我一番の思い。自分が正しい、自分が一番、自分は間違つていない、すべて自分に従え、逆らうな。苦しくて空しくて恨めしくて寂しくて妬ましくて重くて暗い底を這はずり回る、そんな思いしか出てこなくて暗くて苦しいのに離せない、この肉の自分を本物とする思い、形の世界を信じている中で使う我一番の思い。崩したい離していきたいと頭では思つているのに心が全く納得していないから、自分と向き合つたときに出でてくる思いは、我が一番、我が素晴らしい、我が正しい、我に従え、我に逆らうな、私は絶対に間違つていらない、苦しい寂しい暗い思いばかり出てくる。こんな自分やけどこんな自分に優しくなつていきたい。間違つているよ、波動

の世界が真実だよ、と心で知り納得していきた
い。岩盤は田池留吉アルバートだ、とはつきり
と言い切れる自分になつてこの肉を置いていき
たい。

パーセント不服不満反発心が疼く。
自分には自分の仕事への哲学や捉え方があり、
全く何も聞き入れたくない受け入れられない頑固
さがある。

仕事に限らずそれは普段の生活にもふんだんに
表れているように思う。

62

「俺」という岩盤

譲れないもの、守りたいもの、こだわり、許せ
ないもの、捨てられないもの。

未だにまだまだたくさんあるのが現状。大きく
は国家観、民族観、世界観、社会観、歴史観、価
値観、道徳観……。

仕事ひとつ取つても、自分のやり方が正しい。

自分が辿つてきた道筋(苦労、苦惱含む)が正しい。

自分と異なる意見ややり方にに対して一〇〇

その根源とは何だ!? ……その根源は「俺」だ。

「俺」という肉の思い。「俺」という岩盤。

「俺」とは「俺様」であり、「俺は偉い」「我一番」
であり、「我は神也」。そう信じてやまない強靭な

思い、肉が自分だと信じ切っている思い。即ち岩盤。

自分は自分を守りたい。自分は肉の自分を徹底的に守りたい。

自己顕示欲。一糸乱れぬ素晴らしいアマテラスを隠れ蓑に俺は俺を固めていく。

理論武装、思想武装、理屈武装に屁理屈武装。自分は素晴らしいと塗り固め傀儡だろうが砂上の楼閣だろうが己を掲げ表すことに躍起になつてきた。その悠久の歴史がそのまま分厚い層となつて自分という岩盤を固め、大きく勢力を拡大してきた。そうやつて悪魔、化物の自分を誤魔化してきたんだ。

岩盤は誤魔化し。肉の思いと意識との境目が岩盤。岩盤と書いて虚勢とも読めるのかな……。なら「俺」は「岩盤」であり「虚勢」に過ぎないのか。

岩盤のように硬くて簡単には動かせない、取り外せないものはすぐ身近なものでした。私という看板がまさにそれでした。いつの頃からかはつきりしませんが、恐らく高校入学後にはすでに私は他人とは違う自分自身を追求していたような気がします。私が存在しているという証しを求めていたような気がします。特に将来何をするかと選択を迫られたときに私は大きな目立つ看板を描こうとしました。平凡な看板では折角両親から頂いたこの人生を充分に活かすことが出来ないと思いました。しかしこの看板というものは花火のように一時的には目立つても、いずれは無くなり、長目で見ればほとんど残らないという代物だつたんだと今では思います。むしろ自らを苦しめる元凶であつたということがようやく分かつてきました。

た。看板が消えると自分の存在が否定されたような気がします。この思いは反射的に直ぐに出て、これを阻害するものに對して強い反発を感じ苦し

みとなりました。本来のものではない、自ら作つた幻に振り回されてきたような気がします。何も要らなかつたのに、何か足りない何が足りないと悩んで奮闘してきました。愚かな、かわいそうな自分だつたと感じます。仕事を引退した今、看板は大分軽くはなりました。しかし看板を掲げようとした思いはまだそのまま残っています。元々居た穏やかなところに帰りたいとつくづく思います。残された二五〇年、三〇〇年は看板を降ろし、それが無くても生きていく、存在していくといふことが心から分かつていく準備期間であると感じます。今世残された時間にできるだけ看板を軽く、薄くしていきたいと思います。

64

今年、私は『田池留吉に素直になれない心』を見て、いこうと思いました。田池留吉の言うことを聞いてこなかつた。学びの基礎が抜けている。もう一度母親の反省、瞑想をしていこうと思いました。それを邪魔してきたのが、私の岩盤です。

崩したくない、譲れない、それは、肉との帳尻合わせ。肉とのつり合い。学びながらも、反転することなく続けてきました。やつぱり肉だ、肉の手ごたえだ、と思った瞬間から、田池留吉・お母さんを捨てていくんだということが、よくわかつてきました。

また、瞬時にでる、人を助けたいと思う心、肉でなんとかしよう、できると思う心が、肉の果てしない苦勞を自分に課してきました。

その挙句が、徒労と恨みの自業自得。何故、苦

しい私を放つておく？

しんどいことをしてきた私が、犠牲を払つてき
た私が苦しむのは、不条理だ！ いくら心癖とは
いえ、少し笑えてきました。

このごろ、肉では何にもできないんだなと思
います。

むしろ何にもしないほうが
いい。それを今、自分に課し
ています。

『私はいつもあなたのそばに
います』というメッセージが、
心の中に響き渡りました。私
は、今までそう思えなかっ
たんだ。とてもうれしくなり
ました。ほつたらかされたん
じやなかつたんですね。いつも
そばにいてくれたんですか。

私は自分を肉だと思ってきたから。私は、何も
持たない意識なんだと自分に伝えていきます。そ
して、自分の心をほどいていきます。

娘が妊娠して、赤ちゃんの動いている画像を
送つてくれました。口を動かしたり手足を動かし
たりして、とてもうれしそう

に動いています。喜びが伝わつ
てきました。私も、こんなふ
うにお母さんのお腹の中で喜
んでいたんだと思えました。
ゼロ歳の瞑想をするとき、思
いを向けると、その子がこれ
から肉を持つ自分に思えまし
た。娘が私のお母さんのよう
に思えました。愛おしい思い
があふれてきました。



崩すものか、崩すものか、肉を崩すものか。

肉が全て、肉しか信じない！離すものか、絶対に離すものか！徹底的に田池留吉に反抗してやる、お前になんか心を向けるものか！クソ田池、黙れ！黙れ！

岩盤に向けた時に瞬間に出てくる思い。

苦しい、苦しい思い、苦しい～って叫んでいる
その底からは、本当は離したい、でも怖い、怖い、
離すのが怖い恐怖の思いが広がる。

散々反発して抵抗する思いが出た後に、ふっと
心が広がる。

あ～、お母さん、お母さん。そうだ、私は何も
なかつた。何もなかつたんだ。

あ～、心が軽くなる、待ってくれている思いが
広がる。怖がらなくていいと伝わってくる。
ただ待ってくれている思いが優しく広がる。

優しく自分の岩盤を思つていこう。岩盤に思い
を向けることは喜びでした。

ありがとう。ありがとうございます。崩していきます。

私の岩盤。

それは、他力の思い、に尽きます。

他力他力他力で生きてきました。

欲でいっぱい、幸せになりたい思いを抱えて、
この学びにも繋がりました。

切ったように吹き出してくださいました。

己を表す思い、認められたい思い、アマテラスの心、沢山沢山抱えて、繋がつたのです。

地域スカイプ瞑想会でも、塩川さんにワンポイントで言わされました。

他力の中にどっぷり浸かり過ぎて、何が他力かわからなかつたのですよ、と。

そう。自分がしてきた事全てが「他力」である事に気付いてすらいませんでした。

その肉体細胞の呼びかけが、何とも優しかつたです。

心をトントン、つて、間違つてますよ～つて、ちゃんと伝えてくれてるんやな～つて思つたら

ごめん、ありがとう、ごめん。でした。

その思いは今も根深く根強く、底の底の、さらに奥深くにべつたりとヘドロのようにへばりついている感じです。

肉体細胞に優しくない事を沢山してきた自分にも、見限る事なく、いつも気付かせてくれる想いに、ただただ嬉しかつたです。

岩盤に向ける瞑想をした時に、その思いが堰をせきを

お母さん、ありがとう。

何度も何度も繰り返し伝えてくれる、優しい思いに、ありがとうございました。

なかなか一筋縄ではいかないけれど、このヘドロのような他力の思いを優しい温もりに返していただけるよう、

真っ直ぐに真摯に、田池留吉を思い、宇宙を思う瞑想をやつていこうと思いました。
ありがとうございました。

して、そびえ立っている。
子供と今の肉の生活を守りたい。今回コロナウイルス。意識の流れとよくわかつてているけれど、母親だから子供を守らなくては。という思いが出てきます。

岩盤とは違うと思いましたが、この思いしか出でこないので、出させていただきました。

ありがとうございました。

68

ワン、ツー、スリー岩盤。グワーッと体の中からせり上がってくる。

苦しい。頭がクラクラしてくる、異語が飛び出してくる。
クソツ、クソツ、クソツ、負けるものか。離す

67

肉の自分を崩せない。
職場でも、家でも、物凄いエネルギーを垂れ流

ものか、どこまでも逆らつてやる。

認めるものか、この肉が自分ではないと認めて

たまるか！

苦しい、寂しい、でも負けない。頑張るんだ、弱音を吐くな。

戦え、戦つて行くんだ、皆殺しにしろ。勝者になるのだ。

惨めな姿なんか見せてたまるか、かつこよくあれ。

私が掴んで離さないものは戦いの思い。そのためにはパワーを求めてきた。

だれよりも素晴らしいあれど、宇宙のパワーを求めてきた。

騙されるな、戦え、戦うことしかないんだ。

のたうち回ることしかできない、苦しくてたまらない。

ふうっと、田池留吉って思いを向けて見る。寂しい、帰りたい、帰りたいよ。

帰ろう、一緒に帰ろう、あのふるさと、お母さんの中に帰ろう。

確かに岩盤だけど帰りたいという思いもでてきます。

どんなに苦しくても歯を食いしばって頑張ってきた思いはここからきていた。

帰りたいと言つてくる思いとともに、きっと帰ります。



ます。

強固な岩盤を崩していくことは並大抵のことではないけれど、田池留吉を思う、思える、そんな今ある肉の時間を最大限に活かして大切にします。ありがとうございました。

我を見よ、そして我を認めよ……
数えきれない転生の中で、神、仏のパワーを信じ、語り、自分は素晴らしい間違つていない、そんな自分を誇らしく確固たる思いを築いてきた。

心に蓄積された思いは、人を導くことを良しとした優しさという名のもとに、巫女の時の自分の思いそのもの、思いを引きずつたまでした。

そんな自分にようやく気付かせてくれた今世。
どんな自分もやさしい母の温もりの中へ帰つていける。

あなたの中に確かに存在する田池留吉、母親の温もり。

すべてを委ねていけるやさしいやさしい母の温もりを感じてください。

田池留吉からのメッセージが、そう語つてい

岩盤に向けて……思いを見ます。

最初に「お金」「社会通念」（イコール正しい自分）が出てきます。

正しい自分ががっしりとあります。

そこからその下から、

巫女の時の思い。

寂しくつて辛くつて、よるべのない感じ、誰も何も信用できずに、警戒心丸出しでいつも周りに気を遣い顔色を伺つてる。

そんな自分が出てきます。

そして、助けてください。救つてください。何とかしてください。と泣いている。

しくしくメソメソグジグジ

いつまでもいつまでも過去にこだわって、失敗を悔やんで間違った間違った、生きる方向を間違つたと悔やむ自分がネットとドロツとこびりついてます。

ヘドロのようです。

時間を置いて、

もう一度、岩盤に向ける

岩盤の中で、助けてください、救つてください、なんとかしてくださいとおもねる、泣き喚く、泣きじやくる、しくしくメソメソの自分がいる。

アマテラスにかしづき、アマテラスにおもねり、アマテラスのパワーを使って、何とか幸せに導いてもらおうと自分の苦境を救つてもらおうと、虎視眈々こうしてんたんな自分が透けて見えてくる。

「アマテラスの国、日本」と言う言葉が響く。

パワーが好きでした。

お金も、エネルギーも、波動も、私にとってパワーでした。

人より幸せに、人が持つてるものは何でも欲しい。

わがままで頑固で強情な自分。

神経質でこだわりが多く人に譲れない、己が

高い自分。

岩盤は、「己」という意識。

そこはアマテラスのパワーとつながつています。

また、時間を置いて

もう一度、岩盤に向ける

やはり、巫女の時の自分が出る。

何かを一生懸命守つてる。

一瞬、プライドという言葉が出る。

死守しようとしている。

宗教の世界に深く関わってきた。

アマテラスのお話が田池先生から出た頃

いただいたワンポイントメッセージに

「神さまが好きですね」と言うのがあった。

パワー、精神世界に夢中でボロボロになつて
学びにつながつたけど、

自分が神さまが好きだという自覚はなかつた。

今日は、聖母マリアをつかんで

「清く正しく美しく」とそびえたつての自分を
感じました。

自分のプライドと宗教が強くつながつてる感
じがします。

己と言う意識と、そびえ立ちの自分とアマテ
ラスと正しい私。

この辺が一体となつて自分の底で固まつて
る感じです。

自分の中の猛々しいエネルギー

人を成敗しようとするエネルギー

責め裁くエネルギーがしつかりあつてチャンスを狙つて出てくる。

そういうエネルギーを確認できても、反転、包み込むというところができないことを現在、痛感しています。

執拗^{しつよう}で許さない、攻撃、破壊のエネルギー正しい自分が根底にあってなかなか変われない。

意識の転回なしにこのエネルギーを変換していくことの難しさを感じます。

岩盤が少しゆるんだかなと思つても、

岩盤は、寂しい心です。

肉を信じてる。

肉の喜びと幸せに流れていく冷たい自分が岩盤になつています。

そういう自分が残念でなりません。

素直になることの難しさを実感しています。

ふつと肉の生活を生きていると苦しみを巻きつけ、岩盤が戻つてしまふ繰り返しをしているように感じています。

肉からの脱却の難しさ、

再度、夜、

自分のつくってきたエネルギーを反転する難しさを実感して、

「死ぬまで瞑想会」の3月19日の塩川さんとの瞑想の録画を見て一緒に瞑想した後、

(余談ですが、この日の録画をタイムリーに見たかった! けど、見なかつたのも自分、涙、仕方ありません。)

自分の岩盤に思いを向けてみる。



自分の現状を確認して悲しさが込み上げてくる。やはり、失敗した間違った。という後悔と反省の思いがあがる。

自分が甘すぎたことに肉的な反省の思いが出る。

でも、やはりこうして自分の間違いを認めていけることにささやかな喜びを感じる。

それを大事にしたいと思う。

愛を信じてる自分がゼロではないことを喜んでいこうと反省文を読み返して思いました。

肉の自分の努力としてこれからゆつたりとした中で自分を見ていく努力することを課題としていこうと思いました。

反省の機会をありがとうございました。

写真は、肉の私にとつての肉の故郷です。

71

これまで自分の中の岩盤に思いを向けても瞑想をしてはつきりとした思いとして上がつてこなかつた。なんとなくただ漠然^{ぼくぜん}と思つてゐるだけ、

分らない、そんな思いでいた。そんなとき、地域の勉強会の中でお水の実験を通して自分の中の岩盤に向ける瞑想があつた。

岩盤に思いを向ける

岩盤と思いを向けた瞬間、心の中から我は神なりと思いが噴き上がつてきました。えつーと思つた。

こんなにもはつきりと自分の中から思いが上がつてきたことに一瞬驚くとともになんだかうれ

しかつた。

過去、巫女の時代からずっと心の中に持ち続けってきた我一番、我に従え、支配、今も自分の中にしつかりとあるこの思い、過去から現在までこの思いを抱えたまま崩すことができないままに苦しみながら生きてきた。

今も自分の中にしつかりとあるこの思い、アマテラスに心を向け、ともに帰ろう、母の温もりの中に、愛に帰つていこうと、それが今こうして肉持つて学んでいる私のしなければならないことだと伝えてくれていたんです。

ありがとう、ありがとう、そして、ごめんあります

岩盤。それは、肉、肉、肉を前に出して聳え立つている私です。もう止めましようとは度も何度も言われてきてるのに、自分では中々です。今迄夫に周りに出してその心を良しとしてきたんでした。知らぬ間に出て自分は正しいと頭から思い込んでしまっていた。正しい人も偉い人も居ないと知っているのに、出している。

先がない。バカげていると知りながら出でいる。心で知らないからと心をみる。それでもそれでも出している。この頃ふと私が出してる思い肉の世界で作りつづけてきた思い、全部間違い。その世界から田池留吉の世界へ心を移そうと思いました。今コロナウイルスでゆっくりと身体も休めている。心を向けても何も感じれない私。テレビで色々情報をみる。感染者が自分のところもで

る、それに知らぬ間にドンドン己偉い心が出てくる。うーんこれはとコロナウイルスに自然と心がむいた。そしたら優しーい思いが広がった。“心を放しなさいよ”と。私も肉、形を放さなければいけない時など。ありがとうございますの思いがでました。コロナウイルスも感染者も私の教材だったんだと。感じられないからと自分を甘く甘くしてきた。ここを境に今からしつかりと変わらねばならないと思いました。

私の中の岩盤とは何だろう、私に聞いてみる、「肉を守る思い」と出てくる。ああそうだな、大切な人に又は自分に何かあった時、守らなければ！何とかしなければ！すぐにそんな思いが出てくる。田池先生のセミナーで、初めて天変地異

に向かってことがあった。天変地異と思つた途端に、体がゴロゴロとのすごい勢いで転がりだした。もの凄い力だった。こんなエネルギーで、私の大切なものを奪おうとするものに徹底抗戦してきたんだと思い、涙が止まらなかつた。私に私たち人間にもたらされる天変地異、様々な災難苦難、それらを与えるものが神だと思つてきた。だから、私が与える側に成り代わつてやる、私が神になつてやる、そうすればこんなに苦しい目に遭わなくて済むはず、恐怖も絶望の悲しく辛い思いも寂しい思いもしなくて済むはず、そう思い続けてきた過去からの私。私はその思いの数々の私を本当は何とかしてやりたかったんだなと思う。神になりさえすればそんな思いはしなくて済むと安直に思つてしまつてきたたくさんの方。前々回のセミナーで岩盤に向ける瞑想で前に出させてもらつた。私の中の岩盤と思つた。ものすごいエネルギーがあつた、確かにあるけれど、あれ？と同時に思つ

た、そのエネルギーの底にはそれを支えてる全く別のものがあつた。愛？天と地がひっくり返つたような感覚だった。今このコロナ騒動、私の中の岩盤を如実に見せてくれている。次元を超えていくにはとてもとても厳しくて険しい道だけれど、自分の中から出てくる思いとともに田池留吉を思いながら、淡々と自宅学習を続けていこうと思う。

74

崩せないものはない。そんな思いが出てきた。肉を本物として生きていく心が岩盤だつた。でも、本当は違う。己偉しのエネルギー、他力のエネルギーは本当は愛に帰りたい、お母さんの温もりを伝えてほしいと乞い願つてきた。肉に響いているのだけれど、肉に走る思いが切な

秀吉の時代、朱印状を得て、アンナン トンキン 安南や東京（今のベトナム南部から中部）へ通商の船を出し巨富を収めたと言います。

家康時代になっても、了以は朱印船貿易家として活躍していますが、いつも息子与一（素庵）と行を共にしてきました。

しかし了以は自由な気風を以て与一を育ててきたため、決して彼を家業に縛りつけようとはしませんでした。

素庵は「本」の虫であり、学者肌でもありました。書斎人として生涯を過ごすには、父譲りの冒険心もあって、父の引退後も朱印船貿易家として活躍しております。しかし、キリストン取締の余波で海外貿易からも手を引かざるを得なくなってきたのです。

ところで角倉親子は、海外渡航の合間を縫って、京都において一大土木工事に着手しました。大堰川に舟を通そうというのです。今までこの丹波の水を利用して荷物を運ぶことを考えた人間はいません。山が險しく渓谷が深く、大石がごろごろしていたためです。このため丹後、丹波の産物は人の背を借りて山越えをしていました。それを親子は、川の岩を砕き、たかせぶね 高瀬舟（平底の舟）を使って大堰川の舟運を考えたのです。慶長十一年三月、角倉親子は準備を進め、大堰川の開削に着手、これを成功させました。



大堰川（保津峡）



角倉了以



角倉素庵

京都嵐山の渡月橋 —— 関西人なら一度は足を運んだことのある観光地。この橋の下を流れ
れるのが大堰川。おおいがわ この大堰川を舟が通れるようにした親子が

います。角倉了以とその子、角倉素庵です。

大堰川を上流のほうに遊歩道を歩いていくと「大悲閣千光寺」というお寺があります。ここの展望台にある小さなお堂に「角倉了以」の木造が安置されており、かたや素庵の像は、京都三条大橋のたもと「瑞泉寺」という小さなお寺に安置されています。

二人の像を見比べると、父親の了以が鬼のような憤怒の形相、これに対して素庵は福々しい好々爺の風情につくられています。

さて、ここで紹介したいのは、頑固が凝縮したような父親・了以ではなく、逆に好々爺然とした「角倉素庵（名は与一、素庵は号）」のこだわりぶりなのです。

角倉氏は、もと吉田の姓ですが、嵯峨角倉に住したため角倉と呼ばれるようになったと言います。素庵の祖父宗桂は名医として知られていましたが、医師を営むと共に、副業に土倉業をも営んでいました。

その子が角倉了以ですが、彼は勉学に志し、医者でも土倉業でもなく土木工学の技術を研究し、そればかりか海外雄飛の夢を膨らませ、

その病がライ病（梅毒という説もあります）であることを知ったとき、素庵は家督を息子に譲り、財産挙げて宗族、親戚に分かち、
自らは数千巻の蔵書と共に、嵯峨清涼寺の西隣に安居し身を閉ざしました。寛永4（1628）年、素庵57歳の頃でしょうか。

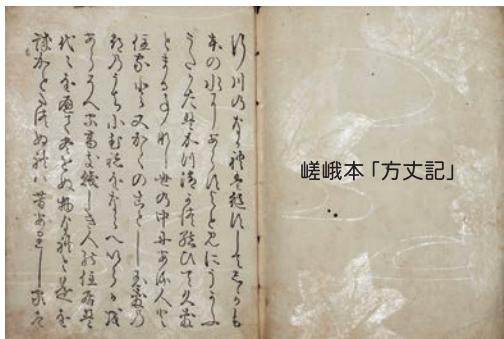
以後の生活は、徐々に進行していく「死」と向かい合わせになりながら、藤原惺窓編するところの「文章達徳録」の研究、増註に励み、病が進み失明してからは、門人に口述して筆録させたと言います。

病勢がさらに進み、いよいよ重態となってからも、輿で読書堂へ体を運ばせ、病間に門人の和田宗允を呼んでは、歐陽修や蘇東坡の文を歎賞したといいます。当時、ライ病と言えば、天刑病・業病とされ、「かったい」と呼ばれ乞食扱いされるのが普通でした。素庵にしてみれば、角倉家からそんな業病患者を出したということ自体が許されなかつたのでしょう。その自責の念と、徐々に進行する「死」に対する懊惱が、学間に逃げ道を見いだしていったのかも知れません。

素庵は、病を恥じ、自ら角倉の菩提寺に葬られることを拒否し、中世以来の無縁墓所、仇野の三昧地に葬られることを希望し、寛永9年6月22日（1632年8月7日）に亡くなりました。



角倉素庵の墓（化野の無縁墓所）



親子はさらに富士川の舟運をも開き、舟を見たことのない甲府の人たちを驚かせ、豊臣秀頼の方広寺の再建に当たっては、大木巨石の運搬のため、人口運河の

計画——鴨川疎通事業をも成功させたのです。

さて了以没後の素庵ですが、次第に鎖国化が進む中、晩年は学問に傾倒し、本阿弥光悦らと共に出版事業に着手することになります。

俗に「嵯峨本」と呼ばれる出版物です。内容は古典文学が主で『伊勢物語』『徒然草』『方丈記』『平家物語』『伊曾保物語』等々、日本で最も美しいと言われる出版全集が、ここに誕生することとなるのです。なにしろ、「角倉素庵」がプロデュースし、字は寛永三筆と言われた「本阿弥光悦」が手掛け、装丁は「俵屋宗達」というのですから、何たる豪華本でしょうか。出版の端くれにいる私としては、写真版ではなく、いつか本物に出会えないかとワクワクするような代物です。

晩年を、出版人として、また学者として充実した日々を送っていた素庵ですが、「不治の病」という難病が彼を襲いました。元和のころ、尾張候から書物の講話とその整理を依頼され、その往復の間に、どうも病をつのらせていったようなのです。

る思いを押し殺してきた。

田池留吉を思い、お母さんを思つた時、ゼロ

歳の自分が伝えてくれる。何もないけど幸せ。

温もり、安らぎの中にある。産まれたての子供を抱いた時の感覚。何度も伝えてもらつた。幸

せだつた。何もなかつた。

ここに戻つてくれればいい。

この温もり、安らぎを信じていけばいい。この思いに触れた時、掴んできた手を緩めることが出来る。何度も何度もここに戻つて、崩せないと思つていた思いを包み込んでいけばいい。心の叫びをしつかりと受け止め、愛へ帰ろうと温もりの中で伝えていけることが嬉しいです。



75

自分にとつての岩盤は、やはり「自分自身」だと感じています。

「歴史に興味がある」とか、「書くことに興味がある」とか、「仕事は面白くなくては」等々……いろいろな「こだわり」を数え上げてみても、結局は「好き」とか「嫌い」とか、「自分に合っている」とか、そういう類の話でしかありませんでした。

それよりなにより、自分自身を見つめなおせば、「自分がしなければ」「自分こそ」「自分が、自分に、自分

を……」と、「自分」「自分」が目白押し。

この「自分」をなくし、この「自分」から解き放たれ、もつと自由になろうと「田池留吉」というドアの前に立つてはいるのですが、ドアを開けてみて、その向こうに広がる世界に尻込みをしている自分がいます。

自分では尻込みしているつもりはないのですが、田池先生を真似て「桐生敏明は死んだ！」と、ドアの向こうへ駆け出し飛び込んだつもりが、気が付けばドアの前で立ち往生^{おうじょう}、まだ「自分が」「自分が」と、やっているお粗末^{そまつ}です。

でも強く強く思います。「自分」という岩盤を突き破つて、「自分」のない「自分」を、いつか感じてみたいと……。

(写真は座間味で撮影したザトウクジラのブロー(潮吹き)です。)



おわりに

十一、三年前に母と同居を始め、一年前に仕事を辞め母と接する時間が長くなりました。いい反省の機会をもらつた。素直に嬉しいと思う。よかつたと思う。間違つて狂つて生き続けてきたから、それをしつかりと今世の肉を通して学べることがありがたい。愛である自分に帰つていこうと固く決意して今世生まれてきた事実は、私の中で絶対に揺らがない。いい意味での岩盤だ。

だからこそ、今世の肉を持つ時間、本当に真っ直ぐに自分の大闇と向き合つていこうと思える。私の肉はそのためにあることを心から感じる。

生ぬるい学びではダメだと自ら言つてゐる。私は私に課したハードルがある。それを超えていきなさいと、二五〇年後の来世の私が伝える。

二五〇年後の私。今、私は過去の私とともに二五〇年後の来世の私とともに生きていることを感じている。

肉でない私。おぞましい凄まじいエネルギーを蓄えてきた私。そのエネルギーを見事転すさたくわ

換して、意識の流れを達成していく計画。計画は外せない。

田池留吉、アルバート。私の中にある真実の私。

捨てない。裏切らない。私は真実の私とともに生きていく覚悟で、今世の肉を用意した。その決意をいつも心に思い起こし、自分の決めてきた予定をしつかりとこなしていこう。揺らがない不動の心。いい意味での岩盤を私は知つていて、心に感じている。信じていこう。平坦な道ではない。厳しく険しい道。それでも私は突き進んでいく。それほどの決意を秘めて、私は生まれてきた。その確認を今、いいえこれから何度も何度もしていくだろう。

(UTAの輪の中でともに学ぼう
1876より 塩川香世)

岩盤に向けて…

初版発行 2020年6月10日

編 集 U T A ブック編集部
発 行 一般社団法人 U T A ブック
TEL 0745-55-8525 FAX 0745-55-8440
印刷・製本 モリモト印刷株式会社

© U TABOOK, Printed in Japan 2020

